



OpenLab Server および OpenLab ECM XT インストールガイド

注意

文書情報

文書番号 D0013946ja Rev. B.00
2024 年 2 月

著作権

© Agilent Technologies, Inc. 2024

本マニュアルの内容は米国著作権法および国際著作権法によって保護されており、Agilent Technologies, Inc. の書面による事前の許可なく、本書の一部または全部を複製することはいかなる形態や方法（電子媒体への保存やデータの抽出または他国語への翻訳など）によっても禁止されています。

Agilent Technologies, Inc.
5301 Stevens Creek Blvd.
Santa Clara, CA 95051

ソフトウェアリビジョン

このガイドは改訂版が発行されるまで OpenLab Server および OpenLab ECM XT のリビジョン 2.7 に対応します。

保証

このマニュアルの内容は「現状有姿」提供されるものであり、将来の改訂版で予告なく変更されることがあります。Agilent は、法律上許容される最大限の範囲で、このマニュアルおよびこのマニュアルに含まれるいかなる情報に関しても、明示黙示を問わず、商品性の保証や特定目的適合性の保証を含むいかなる保証も行いません。Agilent は、このマニュアルまたはこのマニュアルに記載されている情報の提供、使用または実行に関連して生じた過誤、付随的損害あるいは間接的損害に対する責任を一切負いません。Agilent とお客様の間に書面による別の契約があり、このマニュアルの内容に対する保証条項がここに記載されている条件と矛盾する場合は、別に合意された契約の保証条項が適用されます。

技術ライセンス

本書で扱っているハードウェアおよびソフトウェアは、ライセンスに基づき提供されており、それらのライセンス条項に従う場合のみ使用または複製することができます。

権利の制限

米国政府の制限付き権利について：連邦政府に付与されるソフトウェアおよび技術データに係る権利は、エンドユーザーのお客様に通例提供されている権利に限定されています。Agilent は、ソフトウェアおよび技術データに係る通例の本商用ライセンスを、FAR 12.211（Technical Data）および FAR 12.212（Computer Software）、並びに、国防総省に対しては、DFARS 252.227-7015（Technical Data -Commercial Items）および DFARS 227.7202-3（Rights in Commercial Computer Software or Computer Software Documentation）の規定に従い提供します。

安全にご使用いただくために

注意

注意は、取り扱い上、危険があることを示します。正しく実行しなかったり、指示を遵守しないと、製品の破損や重要なデータの損失に至るおそれのある操作手順や行為に対する注意を促すマークです。指示された条件を十分に理解し、条件が満たされるまで、**注意**を無視して先に進んではなりません。

警告

警告は、取り扱い上、危険があることを示します。正しく実行しなかったり、指示を遵守しないと、人身への傷害または死亡に至るおそれのある操作手順や行為に対する注意を促すマークです。指示された条件を十分に理解し、条件が満たされるまで、**警告**を無視して先に進んではなりません。

目次

1 はじめに 6

本書について 7

さまざまなトポロジーのインストール ワークフロー 8

オールインワンおよび Basic Server 8

2 サーバー 8

4 サーバー 9

始める前に 10

システムで使用するすべてのコンピューターに対する管理者権限を取得 10

OpenLab Server/ECM XT インストーラのダウンロード 10

ハードウェアおよびソフトウェアの要件を確認 10

使用するデータベースサーバーを決定 11

サーバーコンピューター（複数可）のセットアップ 11

リモートデータベースサーバーの構成 18

リモート MS SQL データベースサーバーの構成 18

リモート PostgreSQL データベースサーバーの構成 21

Windows ファイルサーバーの共有ストレージの設定 27

Amazon Web Service S3 の準備 28

バケット命名 28

権限および最適な方法 28

クラウド配置 29

2 OpenLab ソフトウェアのインストール 30

Windows Server 2022 の System Preparation Tool の手順 31

OpenLab インストーラの起動 33

OpenLab Content Management サーバー ソフトウェアのインストール 34

ステップ 1- ソフトウェアに必要なコンポーネントのインストールおよびアップグレード 35

ステップ 2- データベーススキーマの作成および更新 38

目次

ステップ 3 - OpenLab Content Management の
インストールおよびアップグレード 44
ステップ 4 - OpenLab Content Management の構成 45

**OpenLab インデックスサーバーの
インストールおよび構成 50**

Java 仮想マシンのチューニング 52

3 OpenLab Content Management サービスの インストール 55

サードパーティツールの準備 56

Adobe Reader のインストール 56

Content Management サービスのインストール 57

4 コントロールパネルの設定 59

コントロールパネルへのアクセス 60

ユーザーの作成 61

ユーザーの追加（内部認証の場合） 61

ユーザーのインポート（Windows ドメイン認証の場合） 63

ロールへユーザーを追加 64

ライセンスの取得 67

ソフトウェアライセンスをオンラインで取得 67

SubscribeNet アカウントの作成（新規ユーザーのみ） 68

ライセンスの作成 68

オフラインのライセンスソフトウェアの取得 70

ライセンスのインストール 71

5	OpenLab ECM XT アドオンのインストール	73
	OpenLab インストーラの起動	74
	Adobe Acrobat プラグイン PDF テンプレートのインストール	74
	Import Scheduler のインストール	76
	Import Services のインストール	76
6	インストール後のタスク	77
	ウィルス対策プログラムの設定	78
	Trend Micro ウィルス対策ソフトウェアの設定	79
	ソフトウェアベリフィケーションの起動	82
	ソフトウェアベリフィケーションツールについて	82
	ソフトウェアベリフィケーションツールの実行	83
	Windows Server 2022 インストールの場合	84
	Windows Server 2022 インストール	84
7	システムのアップグレード	86
	PostgreSQL データベース搭載の 2 サーバー システムのアップグレード	87
	オペレーティングシステム変更時の アップグレード	89
	PostgreSQL データベース 搭載の OpenLab Server/ECM XT のアップグ レード	89
	Oracle データベース搭載の OpenLab Server/ECM XT のアップグ レード	90

目次

8	ソフトウェアのアンインストール	92
	アンインストールについて	93
	OpenLab Content Management のアンインストール	93
9	付録	95
	営業およびサポートのお問い合わせ先	96
	アジレントコミュニティ（英語サイト）	96

本書について 7

さまざまなトポロジーのインストール

ワークフロー 8

オールインワンおよび Basic Server 8

2 サーバー 8

4 サーバー 9

始める前に 10

システムで使用するすべてのコンピューターに対する管理者権限を取得 10

OpenLab Server/ECM XT インストーラのダウンロード 10

ハードウェアおよびソフトウェアの要件を確認 10

使用するデータベースサーバーを決定 11

サーバーコンピューター（複数可）のセットアップ 11

リモートデータベースサーバーの構成 18

リモート MS SQL データベースサーバーの構成 18

リモート PostgreSQL データベースサーバーの構成 21

Windows ファイルサーバーの共有ストレージの設定 27

Amazon Web Service S3 の準備 28

バケット命名 28

権限および最適な方法 28

クラウド配置 29

この章では、本書の概要とインストールの要件について説明します。

本書について

本インストールガイドは、システム管理者が Agilent OpenLab Server または OpenLab ECM XT ソフトウェアをインストールできるようにすることを目的としています。本書に記載された情報は、特に指定のない限り両方の製品に適用されます。

さまざまなトポロジーのインストール ワークフロー

以下の表は、OpenLab Server および ECM XT のさまざまなトポロジーのインストールワークフローをまとめたものです。

オールインワンおよび Basic Server

表 1 オールインワンおよび Basic Server のインストール手順

ステップ	参照セクション
1 サーバーを準備します。	10 ページの「始める前に」および 11 ページの「サーバー コンピューター（複数可）のセットアップ」を参照してください。
2 OpenLab Server/ECM XT をインストールします。	30 ページの「OpenLab ソフトウェアのインストール」を参照してください。

2 サーバー

表 2 2 サーバーのインストール手順

ステップ	参照セクション
1 データベースサーバーを準備します。	10 ページの「始める前に」および 11 ページの「サーバー コンピューター（複数可）のセットアップ」を参照してください。 PostgreSQL はインストーラでインストールされます。その他のデータベースサーバーについては、14 ページの「Microsoft SQL Server の準備」または 15 ページの「Oracle Server の準備」を参照してください。
2 データベースサーバーをインストールします。	18 ページの「リモート MS SQL データベースサーバーの構成」および 21 ページの「リモート PostgreSQL データベースサーバーの構成」を参照してください。

表 2 （続き） 2サーバーのインストール手順

ステップ	参照セクション
3 （オプション） ファイルサーバーを準備します。	11 ページの「 サーバーコンピューター（複数可）のセットアップ 」を参照してください。
4 Content Management サーバーを準備します。	11 ページの「 サーバーコンピューター（複数可）のセットアップ 」を参照してください。
5 Content Management サーバーで、Content Management ソフトウェアをインストールします。	34 ページの「 OpenLab Content Management サーバー ソフトウェアのインストール 」を参照してください。
6 Java 仮想マシンをチューニングします。	52 ページの「 Java 仮想マシンのチューニング 」を参照してください。

4 サーバー

表 3 4サーバーのインストール手順

ステップ	参照セクション
1 データベースサーバーを準備します。	10 ページの「 始める前に 」および 11 ページの「 サーバーコンピューター（複数可）のセットアップ 」を参照してください。 PostgreSQL はインストーラでインストールされます。その他のデータベースサーバーについては、14 ページの「 Microsoft SQL Server の準備 」または 15 ページの「 Oracle Server の準備 」を参照してください。
2 データベースサーバーをインストールします。	18 ページの「 リモート MS SQL データベースサーバーの構成 」および 21 ページの「 リモート PostgreSQL データベースサーバーの構成 」を参照してください。
3 ファイルサーバーを準備します。	11 ページの「 サーバーコンピューター（複数可）のセットアップ 」および 27 ページの「 Windows ファイルサーバーの共有ストレージの設定 」を参照してください。
4 Content Management サーバーを準備します。	11 ページの「 サーバーコンピューター（複数可）のセットアップ 」を参照してください。
5 Content Management サーバーで、Content Management ソフトウェアをインストールします。	34 ページの「 OpenLab Content Management サーバー ソフトウェアのインストール 」を参照してください。
6 インデックスサーバーを準備してインストールします。	50 ページの「 OpenLab インデックスサーバーのインストールおよび構成 」を参照してください。
7 インデックスサーバーをチューニングします。	52 ページの「 Java 仮想マシンのチューニング 」を参照してください。

始める前に

システムで使用するすべてのコンピューターに対する 管理者権限を取得

インストールには、インストールを実行するすべてのサーバーおよびクライアントでシステム管理者権限を持っている必要があります。すべてのサーバーがドメインのメンバーで、インストールで使用するドメインユーザーがローカル管理者であることを確認してください。

インストールまたはアップグレードを行う管理者は、以下の権限も必要になります。SeDebugPrivilege（プログラムのデバッグ）、SeBackup（ファイルおよびディレクトリのバックアップ）、および SeSecurity（監査およびセキュリティログの管理）。

OpenLab Server/ECM XT インストーラのダウンロード

- 1 <https://agilent.subscribenet.com> で SubscribeNet に移動します。
- 2 SubscribeNet のユーザー ID とパスワードでログインします。新規ユーザーの場合、製品の購入時に提供された認証コードを使用して登録し、新しい SubscribeNet アカウントとログイン ID を作成します。
- 3 製品リストで、ダウンロードする OpenLab Server/ECM XT ソフトウェアを見つけ、ローカルドライブにソフトウェアをダウンロードします。
- 4 ローカルハードドライブにソフトウェアパッケージを解凍します。

ハードウェアおよびソフトウェアの要件を確認

選択したシステムをサポートするための適切なハードウェアおよびソフトウェアがあることを確認するには、『*Agilent OpenLab Server* および *OpenLab ECM XT* のハードウェアおよびソフトウェア要件ガイド』を確認してください。このガイドは、OpenLab Server/ECM XT インストーラ（setup.exe）の [プラン] ページから開くことができます。インストールメディアの setup¥docs¥EN にあるドキュメントフォルダーでも確認できます。

使用するデータベースサーバーを決定

以下のサーバーデータベースソフトウェアがサポートされています。

- **PostgreSQL Server**：このデータベースは OpenLab ソフトウェアに付属しており、インストール時にインストールおよびコンフィグレーションできます。または、OpenLab ソフトウェアによって以前にインストールされた既存の PostgreSQL Server をコンフィグレーションできます。付属の OpenLab PostgreSQL Server をインストールする前に、OpenLab 以外にインストールした PostgreSQL Server を削除する必要があります。PostgreSQL のアンインストール時に既存の PostgreSQL データベースが削除される場合があるため、OpenLab Server/ECM XT をインストールする前に既存の PostgreSQL Server のデータを必ずバックアップしてください。21 ページの「[リモート PostgreSQL データベースサーバーの構成](#)」を参照してください。
- **Oracle Server**：このデータベースはインストール時にコンフィグレーションできますが、OpenLab ソフトウェアをインストールする前にインストールする必要があります。15 ページの「[Oracle Server の準備](#)」を参照してください。
- **Microsoft SQL Server**：このデータベースはインストール時にコンフィグレーションできますが、OpenLab ソフトウェアをインストールする前にインストールする必要があります。14 ページの「[Microsoft SQL Server の準備](#)」を参照してください。

注記

次の文字はデータベースのパスワードには使用できません。

- SQLServer の場合：] [“
- PostgreSQL および Oracle の場合：“

サーバーコンピューター（複数可）のセットアップ

- 1 既存のドメインに参加させます。インストール後にサーバーのドメインを変更する場合は、Agilent サポートに直接お問い合わせください。
- 2 最新のセキュリティ修正プログラムとウィルス対策プログラムをインストールするまで、サーバーをインターネットから切断します。

注記

Windows ローカル認証の既存システムをアップグレードする場合、アップグレードを開始する前に、内部または Windows ドメインにサーバーを再設定する必要があります。

- 3 サーバーのオペレーティングシステムをインストールおよびコンフィグレーションします。詳細については、Windows ユーザー情報を参照してください。
- 4 コンフィグレーションをインストールする前に、ポート 80 および 443 を開放してください。World Wide Web 発行サービスがオペレーティングシステムで有効になっている場合、OpenLab のインストールを開始する前に無効にします。

注記

TLS 1.0、TLS 1.1、および SSL 3.0 は OpenLab Server/ECM XT では不要となります。セキュリティ上の理由から、Agilent では、Microsoft が提供する指示に従い、これらのプロトコルを無効にすることをお勧めします。

- 5 **System Preparation Tool** を実行します。ツールは、OpenLab インストールメディアの¥Setup¥Tools¥SPT にあります。

System Preparation Tool は常にインストールの一環として実行されます。ただし、時間のかかる作業やインストール時に伴う再起動を回避するため、Agilent では System Preparation Tool を最初に行うことをお勧めします。

注記

Windows Server 2022 インストールについては、ソフトウェアをインストールする前に31ページの「**Windows Server 2022 の System Preparation Tool の手順**」の手順を行ってください。

- a メディアのコンテンツ全体をローカルドライブにコピーします。
- b コマンドラインからツールを実行するには、以下のコマンドを実行します（必要に応じて Win2016 または Win2019 に置き換えます）。

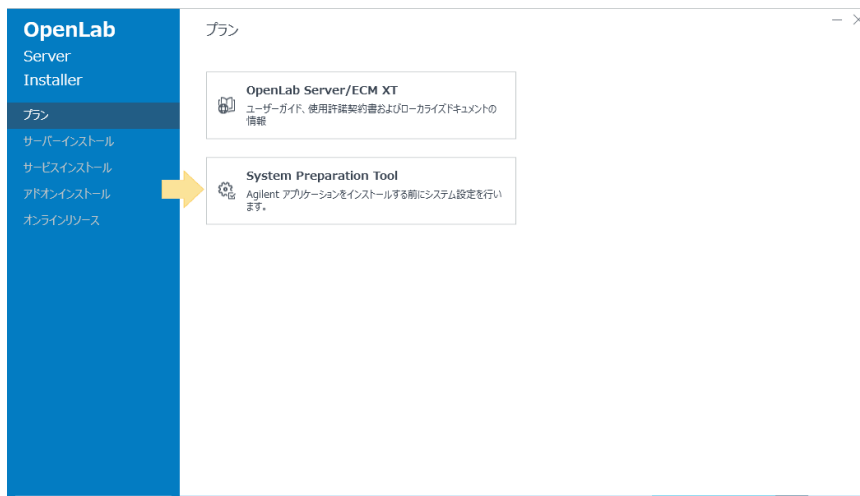
```
SystemPreparationTool.exe -silent ConfigurationName="OpenLab
(CDS, ECMXT)~2.7~Server~Win2019"
```

または、

- c インストーラから SPT を実行するには、**setup.exe** ファイルを右クリックして、管理者としてファイルを実行します。Windows のユーザーアカウント制御（UAC）をオンにしている場合は、作業の続行を明示的に確認しなければなりません。

[OpenLab Server/ECM XT] を選択し、[OK] をクリックします。

[プラン] 画面から、[System Preparation Tool] をクリックします。



- d プロダクトコンフィグレーションを選択し、[続行] をクリックします。
- e ツールがすべての設定を確認し、現在のステータス（合格または不合格）を [現在のコンフィグレーション] ページに表示します。

推奨設定のチェックボックスをオフにすることができます。必須設定はオフにできません。推奨アクションがデフォルトで選択されており、オフにしないとこれらのアクションが適用されます。

すべての設定が選択されたら、[修正の適用] をクリックします。

- f System Preparation Tool が選択した設定の修正を行い、新しいステータスが [コンフィグレーションの更新] ページに表示されます。

[ログファイルを開く] をクリックして、実行されたすべてのアクションのログを表示します。

[次へ] をクリックします。

- g システム準備レポートに、選択したすべての設定の新しいステータスが一覧表示され、手動で修正する必要がある設定に対する指示が提供されます。

レポートを印刷するには、[レポートの印刷] をクリックします。

System Preparation Tool を閉じるには、[完了] をクリックします。

- 6 ウィルス対策プログラムを使用している場合、78 ページの「**ウィルス対策プログラムの設定**」に記載されたとおりに設定されていることを確認します。

- 7 サーバー名を取得します。インストール時にこの情報を入力する必要があります。サーバー名にアンダースコア（_）を使用しているサーバーには、ソフトウェアはインストールされません。
- 8 サーバー管理者の資格情報を取得します。インストール時にこの情報を入力する必要があります。
- 9 データベースインデックスに使用するディレクトリの場所を決定します。インストール時にこの情報を入力する必要があります。
- 10 データベースコンテンツに使用するディレクトリまたは Amazon Web Service の場所を決定します。インストール時にこの情報を入力する必要があります。

Microsoft SQL Server の準備

Microsoft SQL Server を OpenLab データベースとして使用する場合は、OpenLab ソフトウェアをインストールする前に次の手順を完了してください。サポートされる SQL Server のバージョンについては、『*Agilent OpenLab Server* および *OpenLab ECM XT* のハードウェアおよびソフトウェア要件ガイド』を確認してください。

注記

データベースサーバーコンフィグレーションの XACT_ABORT プロパティがオフに設定されている必要があります。デフォルトでは、すでにオフに設定されています。ただし、カスタムインストールを実行した場合、このプロパティを必ずオフに設定してください。

SQL Server ソフトウェアの詳細については、Microsoft のドキュメントを参照してください。

- 1 Microsoft SQL Server をインストールします。
- 2 インストール中は、サーバーの認証を混合モードに変更します。サーバーレベルの照合が **SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS** であることを確認します。
- 3 ユーザー sa のログインを有効にします。
- 4 **SQL Server** サービスを再起動し、**SQL Server 認証**でログインします。
- 5 **レポート サービス**機能を無効にします。これらのサービスはポート 80 を使用しており、OpenLab Content Management ウェブサーバーと対立します。詳細については、SQL ユーザー情報を参照してください。

データベースサーバーが OpenLab Content Management サーバーから分離されている場合、OpenLab Content Management サーバーおよび OpenLab インデックスサーバーからのリモートアクセスリクエストを許可するようデータベースサーバーをコンフィグレーションします。

スクリプトを使用したデータベースの準備

prepare_db_mssql.sql スクリプトを使用して、OpenLab Server または ECM XT 用の OLSharedServices および DataStore データベースを作成できます。スクリプトで指示します。

スクリプトでは完全なデータベース構造は作成されません（テーブルなど）。インストーラの実行時は、データベースへの完全なアクセス権を持つドメインユーザーである必要があります。インストーラを実行する前に、データベース名、ユーザー、およびパスワード（olss および dsadmin など）があることを確認してください。混合モードを有効にする必要があります。

Oracle Server の準備

Oracle Server のデータベースを使用する場合、OpenLab ソフトウェアをインストールする前に、Oracle のインストールおよび設定が必要になります。

- 1 Oracle Server をインストールします。インストール時：
 - a Oracle の場合、[コンテナ・データベースとして作成] を選択しないでください。
 - b **AL32UTF8** を Oracle のデータベース文字セットとして設定してください。
 - c **SYS & SYSTEM** ユーザーのパスワードを設定してください。
- 2 サーバーコンフィグレーションを変更します。テキストインデックス用の **CTXSYS** アカウントのロックを解除し、パスワードを指定してください。

Oracle Server をホットバックアップ用にコンフィグレーションする

この手順を使用して、ホットバックアップを実行するよう Oracle Server データベースを準備します。この手順は 1 回実行するだけで済みます。データベースアクティビティが発生していないときにのみこの手順を完了してください。

- 1 16 ページの「高速リカバリ領域（FRA）用フォルダーの作成」。
- 2 16 ページの「高速リカバリ領域（FRA）のコンフィグレーション」。
- 3 17 ページの「データベースを ARCHIVELOG モードに設定」。
- 4 17 ページの「保持ポリシーの設定」。

注記

すべての RMAN および SQL コマンドには、コマンドの最後にセミコロン (;) が必要です。

注記

RMAN または SQL コマンドを実行する前に、データベースへの接続を確立します。前のコマンドで接続を閉じた場合（SHUTDOWN IMMEDIATE など）、RMAN または SQL コマンドを実行する前にデータベース接続を再度確立することが必要な場合があります。

高速リカバリ領域（FRA）用フォルダーの作成 FRA 用の高性能ドライブにフォルダーを作成します。Oracle では、保存場所は Oracle データベースファイルを保存する同じドライブ上にしないことを推奨しています。

高速リカバリ領域（FRA）のコンフィグレーション FRA は、Oracle が管理する記憶領域で、リカバリ関連のファイルを収容します。フォルダーを作成したら、以下のコマンドを実行して FRA をコンフィグレーションします。

表 4 FRA をコンフィグレーションするためのコマンド

ツール	コマンド
Windows コマンドライン	sqlplus /nolog
SQL	CONNECT SYS/thepassword AS SYSDBA
SQL	ALTER SYSTEM SET DB_RECOVERY_FILE_DEST_SIZE = '6G' システムに適したサイズについては DBA にご相談ください。
SQL	ALTER SYSTEM SET DB_RECOVERY_FILE_DEST = 'Path¥to¥FRA' これは、リカバリ関連のオブジェクトを配置するロケーションです（バックアップファイルなど）。
SQL	ALTER SYSTEM SET LOG_ARCHIVE_DEST_1 = 'LOCATION=USE_DB_RECOVERY_FILE_DEST'

これらの値を、SQL SHOW コマンドを使用して表示できます。

例：SHOW PARAMETER DB_RECOVER_FILE_DEST

データベースを ARCHIVELOG モードに設定 ARCHIVELOG モードは、Oracle でホットバックアップを有効化するために設定します。設定すると、データベースアクティビティが発生したときにログが自動的に作成されます。以下のコマンドを実行します。

表 5 データベースを ARCHIVELOG モードに設定するためのコマンド

ツール	コマンド
SQL	SHUTDOWN IMMEDIATE
	このコマンドを実行する前に、すべてのユーザーがシステムからログオフしており、実行中のジョブがないことを確認してください。すべての SQL アクティビティが停止します。
SQL	STARTUP MOUNT
SQL	ALTER DATABASE ARCHIVELOG
SQL	ALTER DATABASE OPEN

現在のモードを表示するには、以下の SQL コマンドを実行します。

```
SELECT LOG_MODE FROM V$DATABASE
```

保持ポリシーの設定 保持ポリシーによって、データ回復の目的に合わせてバックアップファイルが不要になるタイミングを決定します。FRA の使用中は、Oracle が古いファイルを自動的に削除します。以下のコマンドを実行します。

表 6 保持ポリシーを設定するためのコマンド

ツール	コマンド
Windows コマンドライン	rman TARGET SYS@<YOURINSTANCENAME> nocatalog Oracle インスタンス名を置換します。コマンドに <> を含めないでください。 例： rman TARGET SYS@OPENLAB nocatalog
RMAN	CONFIGURE RETENTION POLICY TO RECOVERY WINDOW OF 7 DAYS バックアップ戦略に適した値については DBA にご相談ください。

リモートデータベースサーバーの構成

このセクションの手順を使用して、リモートデータベースサーバーをコンフィグレーションします。

注記

このセクションの手順は、Basic Server やオールインワンサーバーには適用されません。

リモート MS SQL データベースサーバーの構成

MS SQL Server がすでにインストールされている場合、このセクションの手順に従ってください。インストールされていない場合は、MS SQL Server をインストールし、コンフィグレーション時に混合モードを設定してください。

ステップ 1 - SQL Server ネットワークのコンフィグレーション

1 [スタート] > [Microsoft SQL Server] > [SQL Server 構成マネージャー] をクリックします。

- a [SQL Server ネットワークの構成] を展開します。
- b 左のパネルで、インスタンスの [プロトコル] を選択します。
- c 右のパネルで、[名前付きパイプ] を右クリックし、[有効にする] を選択します（無効になっている場合）。

名前付きパイプは、プロセス間の通信用の Windows のシステムです。SQL Server の場合、サーバーがクライアントと同じマシン上にある場合は、TCP/IP とは対照的に、名前付きパイプを使用してデータを転送することが可能です。

- 2 **【SQL Server のサービス】** を選択し、停止になっているサービスを実行します。

SQL ServerBrowser プログラムが Windows サービスとして実行され、Microsoft SQL Server リソース用の受信要求を待機し、コンピューターにインストールされた SQL Server インスタンスに関する情報を提供します。

SQL Server エージェント は、スケジュールされた管理タスクを実行する Microsoft Windows サービスで、このタスクは SQL Server で呼び出されるジョブです。

- 3 停止になっているサービスに対して、
 - a サービスを右クリックし、**【プロパティ】** を選択します。
 - b **【サービス】** タブの **【開始モード】** ドロップダウンメニューで、**【自動】** を選択します。

ステップ 2 - SQL サービスの再起動

すべての SQL サービスを再起動するか、PC を再起動します。すべての SQL サービスを再起動する場合、サービスを開くには 2 通りの方法があります。

- **【スタート】** をクリックし、検索フィールドに **サービス** と入力して、サービスを開き、すべての SQL サービスを再起動します。
- **【スタート】** をクリックし、**【コントロールパネル】** > **【管理者ツール】** > **【サービス】** を開き、すべての SQL サービスを再起動します。

ステップ 3 - ウィルス対策設定のコンフィグレーション

ウィルス対策をインストールした場合、MS SQL Server が 1433（デフォルト）および 1434（カスタムインスタンス）用のポート経由のリモート TCP 接続で動作するように設定する必要があります。

また、sqlservr.exe を例外に追加します。これにより、ドメインネットワークとパブリックおよびプライベートの両方でアプリケーションが動作できます。

これは、ウィルス対策によって「不要な」ネットワークトラフィックがブロックされることがあるため、SQL Server の場合に必要です。

たとえば、%ProgramFiles%\Microsoft SQL Server\MSSQL15.CUSTOMINSTANCE\MSSQL\Binn\sqlservr.exe を追加します。

ウィルス対策をインストールしていない場合、Windows Defender ファイアウォールを設定する必要があります。

- 1 [コントロールパネル] > [システムとセキュリティ] > [Windows Defender ファイアウォール] > [詳細設定] > [受信の規則] へ移動します。
- 2 リストから [ファイルとプリンターの共有 (SMB 受信)] を右クリックし、[規則の有効化] を選択します。
- 3 左のパネルで、[受信の規則] を右クリックし、[新しい規則] を選択します。
- 4 [プログラム] をクリックし、[次へ] をクリックします。
- 5 [このプログラムのパス] を選択し、sqlservr.exe へのパスを入力し、[次へ] をクリックします。
- 6 [接続を許可する] を選択し、[次へ] をクリックします。
- 7 [すべて] チェックボックスをオンにし、[次へ] をクリックします。
- 8 名前を追加し、[完了] をクリックして規則を作成します。

別のインスタンスがある場合、TCP ポート 1433 および UDP ポート 1434 の規則も追加する必要があります。

- 1 [ポート] を選択し、[次へ] をクリックします。
- 2 ポートを追加し、[次へ] をクリックします。
- 3 [接続を許可する] を選択し、[次へ] をクリックします。
- 4 [すべて] チェックボックスをオンにし、[次へ] をクリックします。

ステップ 4- SQL Server ログイン設定の構成

PC をドメインに追加した後などに新規ユーザーを追加する場合、MS SQL Management Studio を使用して作成できます。

- 1 Management Studio を開きます。
- 2 サーバーに接続します。
- 3 [セキュリティ] > [ログイン] を選択します。
- 4 ローカルまたはドメインユーザーを追加するには、[ログイン] を右クリックし、[新しいログイン] を選択します。
- 5 [検索] をクリックし、ユーザー名を入力して [OK] をクリックします。
- 6 このユーザーに対して [サーバーロール] タブを開き、[sysadmin] ロールを選択します。

注記

ドメインユーザーを使用している場合、同じ名前のローカルユーザーは存在することができません。

これらのタイプのユーザーは、データベース用の Windows 認証設定がある場合にのみ使用できます。

これらのすべての手順が完了したら、OpenLab Server/ECM XT 用のサーバーインストールのステップ 1 と 2 へ進み、必要なサーバーアドレス、インスタンス名を指定し、MS SQL Management Studio で追加したログインを使用します。

リモート PostgreSQL データベースサーバーの構成

注記

このセクションの手順は、Basic Server やオールインワンサーバーのインストールには適用されません。

OpenLab インストーラから、[ステップ 1 - ソフトウェアの必要コンポーネントのインストールまたはアップグレード] を実行します。完了したら、コンピュータを再起動し、以下のコンフィグレーション手順を実行します。

注記

Content Management サーバーで OpenLab インストーラのステップ 1 を実行する前に、データベースサーバーをインストールおよびコンフィグレーションしてください。

ステップ 1 - PostgreSQL Server ネットワークコンフィグレーション

- 1 コメントを解除し、`postgresql.conf` ファイルの `listen_addresses` を `'localhost'` から `*` へ変更します。このファイルは、`C:\ProgramData\Agilent\PostgreSqlData-14-OLCM` です。
- 2 リモートマシンが PostgreSQL Server に接続できるように `pg_hba.conf` ファイルを修正します。デフォルトでは、PostgreSQL インスタンスは PostgreSQL ホスト自体からの接続のみ許可するよう設定されています。リモート OpenLab Server/ECM XT サーバーが PostgreSQL データベースに接続できるようにするには、リモート OpenLab Server/ECM XT サーバーまたは OpenLab インデックスサーバーごとに `pg_hba.conf` に 4 行を追加する必要があります。メソッド `md5` は、OpenLab Server/ECM XT インストーラのステップ 1 を使用して展開されたすべての PostgreSQL サーバーで必須です。

IPv4 アドレスが 172.16.0.111 で IPv6 アドレスが fc00:1ac4:65fb:34cb:e71c:db64:c33:e1ed の OpenLab Server/ECM XT サーバーに以下の行を追加します。

```
host all "postgres" 172.16.0.111/32 md5
host all "postgres" fc00:1ac4:65fb:34cb:e71c:db64:c33:e1ed/128 md5
host all all 172.16.0.111/32 md5
host all all fc00:1ac4:65fb:34cb:e71c:db64:c33:e1ed/128 md5
```

pg_hba.conf で単一の IP アドレスではなくサブネット範囲で定義することができます。以下の例では、アドレス範囲 172.16.0.0 から 172.16.0.255 およびアドレス範囲 fc00:1ac4:65fb:34cb::/64 IPv6 からの PostgreSQL データベースサーバーへのすべての接続を許可しています。

```
host all "postgres" 172.16.0.0/24 md5
host all "postgres" fc00:1ac4:65fb:34cb::/64 md5
host all all 172.16.0.0/24 md5
host all all fc00:1ac4:65fb:34cb::/64 md5
```

詳細については、PostgreSQL pg_hba.conf のドキュメントを参照してください。

OpenLab Server/ECM XT ホストへの PostgreSQL データベースアクセスを制限することで、セキュリティが強化されます。ファイアウォールを同様に設定すると、データベースサーバーのリモートアクセスがさらに効果的に制限されます。

ステップ 2- カスタムユーザーの設定

リモート PostgreSQL Server を用いたシステムをリストアするには、管理権限を持つドメインアカウントを使用する必要があります。4 台のサーバーを使用するトポロジの場合、これは、「コールド」バックアップおよびリストア中に PostgreSQL サービスを開始および停止するために必要なシステム管理リソースへのアクセスを有効にするために必要です。

アカウントを作成または設定は、説明に従ってください。すでに管理者が存在する場合は、この手順をスキップし、24 ページの「**ステップ 3- ファイアウォール設定のコンフィグレーション**」に進んでください。

アカウントには任意のカスタム名を使用できます。

- 1 PC にアカウントを追加します。
 - a [スタート] > [設定] > [アカウント] > [他のユーザー] > [その他のユーザーをこの PC に追加] > [ユーザー] をクリックします。
 - b [ユーザー] を右クリックし、[新しいユーザー] を選択します。
 - c ユーザー情報とパスワードを追加し、[作成] をクリックします。
(期限切れにならないユーザーパスワードを設定することをお勧めします。)
- 2 管理者グループにアカウントを追加します。
 - a [スタート] > [設定] > [アカウント] > [他のユーザー] > [その他のユーザーをこの PC に追加] > [グループ] をクリックします。
 - b [Administrators] を右クリックします。
 - c [プロパティ] を選択します。
 - d [追加] をクリックし、新しいアカウントを入力します。

ステップ 3 - ファイアウォール設定のコンフィグレーション

サードパーティのファイアウォールをインストールした場合、PostgreSQL Server が、インストール時に指定されたポート経由のリモート TCP 接続で動作するように設定する必要があります。Windows Defender ファイアウォールを使用している場合、以下の説明に従ってください。

- 1 [コントロールパネル] > [システムとセキュリティ] > [Windows Defender ファイアウォール] > [詳細設定] > [受信の規則] へ移動します。
- 2 リストから [ファイルとプリンターの共有 (SMB 受信)] を右クリックし、[規則の有効化] を選択します。
- 3 リストから [ファイルとプリンターの共有 (エコー要求 - ICMPv4 受信)] を右クリックし、[規則の有効化] を選択します。
- 4 左のパネルで、[受信の規則] を右クリックし、[新しい規則] を選択します。
- 5 [ポート] を選択し、[次へ] をクリックします。
- 6 デフォルトポート 5432 またはインストール時に使用したカスタムポートを追加し、[次へ] をクリックします。
- 7 [接続を許可する] を選択し、[次へ] をクリックします。
- 8 [すべて (ドメイン、パブリック、プライベート)] チェックボックスをオンにし、[次へ] をクリックします。
- 9 名前を入力し、[終了] をクリックします。

ステップ 4 - PostgreSQL サービスの再起動

PostgreSQL サービスを再起動するか、PC を再起動します。サービスを再起動するためのサービスを開くには 2 通りの方法があります。

- [スタート] をクリックし、検索フィールドに「サービス」と入力して、サービスを開きます。
- [スタート] をクリックし、[コントロールパネル] > [管理者ツール] > [サービス] へ移動します。

PostgreSQL サービス olcm-postgresql-x64-14 を右クリックし、[再起動] を選択します。

外部 PostgreSQL Server のチューニング

以下の手順は、メモリが 32GB の外部 PostgreSQL Server の例です。

PostgreSql は、C:¥Program Files (x86)¥PostgreSQL-14-OLCM にインストールされます。

PostgreSql データは、E:¥ProgramData¥Agilent¥PostgreSqlData-14-OLCM にインストールされます。

WAL (Write-Ahead log) を別のディスクに設定します。

- 1 Postgres サービスを停止します。
- 2 WAL フォルダー -
E:¥ProgramData¥Agilent¥PostgreSqlData-14-OLCM¥pg_wal を F:¥pg_wal へ移動します。
- 3 コマンドプロンプトを（管理者として）使用して、以下のコマンドを実行します。

```
mklink /D "E:¥ProgramData¥Agilent¥PostgreSqlData-14-OLCM¥pg_wal" F:¥pg_wal
```

- 4 E:\ProgramData\Agilent\PostgreSqlData-14-OLCM\postgresql.conf の以下のパラメータを更新しコメントを解除します（コメントが付けられている場合）。

表 7 PostgreSQL コンフィグレーション

	2 サーバソリューション用 データベース	4 サーバソリューション用 データベース
	2xCPU-2.6Ghz 以上 最小 16 vCPU 32 GB	2xCPU-2.6Ghz 以上 最小 16 vCPU 64 GB
max_connections	150	300
shared_buffers	8 GB	16 GB
effective_cache_size	24 GB	48 GB
maintenance_work_mem	2097151 kB	2097151 kB
checkpoint_completion_target	0.9	0.9
wal_buffers	16 MB	16 MB
default_statistics_target	100	100
random_page_cost	1.1（SSD ストレージ使用の 場合） 4（HDD ストレージ使用の 場合）	1.1（SSD ストレージ使用の 場合） 4（HDD ストレージ使用の 場合）
work_mem	9175 kB	18495 kB
min_wal_size	2 GB	2 GB
max_wal_size	8 GB	8 Gb
max_worker_processes	12	12
max_parallel_workers_per_gather	4	4
max_parallel_workers	12	12
max_parallel_maintenance_workers	4	4

Windows ファイルサーバーの共有ストレージの設定

このセクションは、4- サーバートポロジをインストールしている場合に適用されます。

共有ストレージは、OpenLab Server/ECM XT のコンテンツを維持するために設定します。共有ストレージは、OpenLab Server/ECM XT Content Management サーバー用のサービスアカウントである Windows ドメインユーザーからのアクセスのみ許可することで保護されます。

共有ストレージフォルダーをサーバーに設定するには：

- 1 Windows ファイルサーバーに、ローカル管理者グループのメンバーである Windows ドメインユーザーとしてログインします。
- 2 共有ストレージフォルダーを作成します。
- 3 共有ストレージフォルダーを右クリックし、**【プロパティ】**を選択します。
- 4 **【共有】** タブを選択します。
- 5 **【詳細な共有】** をクリックします。
- 6 Windows ドメインユーザーアカウント（サービスアカウント）を追加し、読み取り / 書き込み許可を与えます。
- 7 **サーバーマネージャ**を開きます。
- 8 **【ファイルサービスと記憶域サービス】 > 【共有】** を選択します。
- 9 設定された共有ストレージを右クリックし、**【プロパティ】** を選択します。
- 10 **【設定】** を選択します。
- 11 **【アクセス許可設定に基づいた列挙を有効にする】** を選択します。
- 12 **【共有のキャッシュを許可する】** をオフにします。
- 13 **【OK】** をクリックします。

ファイルサーバーはさまざまなオペレーティングシステム上や、SMB プロトコルを使用してストレージ共有をサポートする NAS 上に設定できます。

Amazon Web Service S3 の準備

Amazon Web Services S3 をファイルストレージに使用する場合、以下の情報を確認してください。

バケット命名

バケット名は 3 ～ 63 文字の長さにする必要があります。バケット名は、小文字、数値、およびハイフン (-) のみで構成できます。

バケットにピリオド (.) を使用することができますが、DNS 名として適切でないためお勧めしません。さらに、ピリオド (.) があると仮想ホストや証明書バリデーションが正しく機能しません。

権限および最適な方法

- S3 バケットがインターネット経由で「公的に」アクセス可能でないことを確認してください。集中管理を使用してアクセスを制限してください。
- 「最低特権アクセス」の原則に従ってください。タスクを実行するために必要な権限のみ付与してください。
- OpenLab Server/ECM XT の場合、S3 バケット（プライマリおよびアーカイブ）にコンテンツを保存するために必要な最小権限は以下のとおりです。

```
s3:PutObject
s3:GetObject
s3:ListBucketMultipartUploads
s3:ListBucket
s3:DeleteObject
s3:GetObjectVersion
s3:ListMultipartUploadParts
```

- サーバー側の暗号化を有効にしてください。
- オブジェクトのバージョン管理を有効にしてください。
- EC2 インスタンスが S3 バケットにアクセスし、EC2 インスタンスに IAM ロールが割り当てられている場合、EC2 インスタンスの IAM ロールは、サーバーコンフィギュレーションユーティリティで実行したコンフィギュレーションより優先されます。

クラウド配置

ECM XT は、ソフトウェア保守契約で OpenLab CDS と同時にインストールする場合、クラウド環境に展開できます。クラウドでの ECM XT のコンフィグレーション方法については、Agilent の担当者に問い合わせるか、以下で入手できる OpenLab CDS コンフィグレーションを参照してください。

- <https://servicedesk.li.agilent.com/plugins/servlet/desk>.

2

OpenLab ソフトウェアのインストール

Windows Server 2022 の System Preparation Tool の手順 **31**

OpenLab インストーラの起動 **33**

OpenLab Content Management サーバー
ソフトウェアのインストール **34**

ステップ 1 - ソフトウェアに必要なコンポーネントのインストールおよびアップグレード **35**

ステップ 2 - データベーススキーマの作成および更新 **38**

ステップ 3 - OpenLab Content Management の
インストールおよびアップグレード **44**

ステップ 4 - OpenLab Content Management の構成 **45**

OpenLab インデックスサーバーの
インストールおよび構成 **50**

Java 仮想マシンのチューニング **52**

ここでは、OpenLab Server または OpenLab ECM XT ソフトウェアのインストール手順を説明します。

OpenLab Content Management サーバーおよび OpenLab インデックスサーバー用のサービスアカウントとして、Windows ドメインユーザーが必要です。

Windows Server 2022 の System Preparation Tool の手順

Windows Server 2022 サーバーに OpenLab Server/ECM XT v2.7 をインストールする場合、System Preparation Tool (SPT) はインストールの一部として自動的に実行されません。インストールサーバーを適切に構成するには、インストーラから SPT を手動で実行する必要があります。

- 1 インストーラから SPT を実行するには、setup.exe ファイルを右クリックして、管理者としてファイルを実行します。Windows のユーザーアカウント制御 (UAC) をオンにしている場合は、作業の続行を明示的に確認しなければなりません。**OpenLab Server/ECM XT** を選択し、**OK** をクリックします。
- 2 **プラン** ページで、**System Preparation Tool** をクリックします。
- 3 プロダクトコンフィグレーションを選択し、**続行** をクリックします。

注記

利用可能なプロダクトコンフィグレーションに、オペレーティングシステムとして Windows Server 2022 (Win2022) は表示されません。代わりに適切な Win2019 プロダクトコンフィグレーションを選択してください。たとえば、OpenLab ECM XT 2.7 サーバーを Windows Server 2022 にインストールする場合、“OpenLab (CDS, ECMXT)~2.7~Server~Win2019” を選択してください。

- 4 ツールがすべての設定を確認し、現在のステータス（合格または不合格）を現在のコンフィグレーションページに表示します。
推奨設定のチェックボックスをオフにすることができます。必須設定はオフにできません。推奨アクションがデフォルトで選択されており、オフにしないとこれらのアクションが適用されます。
すべての設定が選択されたら、**修正の適用** をクリックします。
- 5 SPT により選択した設定が修正され、新しいステータスが**コンフィグレーションの更新** ページに表示されます。
ログファイルを開く をクリックして、実行されたすべてのアクションのログを表示します。**次へ** をクリックします。

注記

システムに適用する SPT の必須設定に、.NET Framework 3.5 のインストールがあります。この作業には、インターネット接続が必要です。コンピューターがインターネットにアクセスできない場合、SPT のこのステップは失敗し、.NET Framework 3.5 を手動でインストールする必要があります。Microsoft では複数のインストールオプションを提供しています。詳細については、以下を参照してください。

<https://docs.microsoft.com/ja-jp/windows-hardware/manufacture/desktop/deploy-net-framework-35-by-using-deployment-image-servicing-and-management--dism>

または

<https://learn.microsoft.com/ja-jp/dotnet/framework/install/on-server-2022>

-
- 6 システム準備レポートに、選択したすべての設定の新しいステータスが一覧表示され、手動で修正する必要がある設定に対する指示が提供されます。
レポートを印刷するには、**レポートの印刷**をクリックします。
SPT を閉じるには、**終了**をクリックします。

OpenLab インストーラの起動

以下の手順で OpenLab インストーラを起動します。

- 1 ローカルドライブにソフトウェアパッケージを解凍します。 **setup.exe** ファイルを右クリックして、管理者としてファイルを実行します。Windows のユーザーアカウント制御（UAC）をオンにしている場合は、作業の続行を明示的に確認しなければなりません。
- 2 **[OpenLab Server/ECM XT]** を選択し、**[OK]** をクリックします。

OpenLab Content Management サーバー ソフトウェアのインストール

Shared Services アクティビティログレコードの数が多い（3,000 万レコードを超えるなど）システム上でアップグレードする場合、データベースタイプによっては、データベースのアップグレードと移行に 2 時間以上かかることがあります。データベースタイプに応じた大規模アップグレードの計画を立ててください。

注意

インストール中に異なるロケーションを選択した場合は、その情報を保存しておいてください。その情報は、ハードウェアやソフトウェアの不具合によりシステムが操作不能になるという予期せぬ事態が発生した場合に、システムをリストアするために必要です。

注記

PostgreSQL を使用した 4 サーバーシステム用のインデックスサーバーをインストールする場合、インストーラのステップ 2 をスキップしてください。ステップ 4 で、構成するデータベース情報を指定してください。

OpenLab ソフトウェアのインストール

ステップ 1 - ソフトウェアに必要なコンポーネントのインストールおよびアップグレード

ステップ 1 - ソフトウェアに必要なコンポーネントのインストールおよびアップグレード

- 1 [サーバーインストール] 画面から、[ステップ 1 - ソフトウェアに必要なコンポーネントのインストールおよびアップグレード] をクリックします。



- 2 [データベースタイプ] タブで、使用するサーバーデータベースを選択し、[次へ] をクリックします。

PostgreSQL Server を選択した場合、システムのアップグレード後に必要なデータベースがバージョン 14.x に更新されます。バックアップとリストア手順については、『*Agilent OpenLab Server* および *OpenLab ECM XT* 管理者ガイド』を参照してください。 **36 ページのステップ 3** に進みます。

Oracle Database Server または **Microsoft SQL Server** を選択した場合、**36 ページのステップ 5** に進みます。

- 3 [PostgreSQL] タブで、新規インストールの場合は、**サーバー名**と**ポート**を入力し、[次へ] をクリックします。
更新の場合は、この画面は表示されません。
- 4 [PostgreSQL 設定] タブで、**インストールとデータベースロケーション**を入力します。PostgreSQL スーパーユーザーのパスワードを作成および確認します。アップグレードの場合は、この画面は表示されません。

注記

PostgreSQL インストールパスとデータベースロケーションに、“t”、“r”、または“n”の文字で始まるフォルダー名を含めることはできません。

たとえば、PostgreSQL インストールパス “C:\Program Files (x86)\test\Agilent Technologies” や PostgreSQL データベースロケーション “C:\Program Files (x86)\test\PostgreSQL-10-OLCM” は許可されません。

注記

次の文字はデータベースのパスワードには使用できません。

- SQLServer の場合：] [“
- PostgreSQL および Oracle の場合：“

- 5 [次へ] をクリックします。
- 6 [データーポジトリ] タブで、データーポジトリアカウントのパスワードを入力および確認します。アップグレードの場合、新しいパスワードを入力すると既存のパスワードがリセットされます。パスワードは必ず安全な場所に記録しておいてください。

データーポジトリは、診断およびトポロジー関連の内部ストレージインフラストラクチャです。

[次へ] をクリックします。

- 7 **【システム準備】** ページは、Windows の必須および推奨設定が適用されません。

注記

Windows Server 2022 にインストールする場合、インストール開始前に System Preparation Tool を実行する必要があります。31ページの「**Windows Server 2022 の System Preparation Tool の手順**」を参照してください。システム準備ページに以下のエラーが表示されます。「“OpenLab (CDS, ECMXT)~2.7~Server~Unknown.sysprep” コンフィグレーションが見つかりません。システム準備はスキップされます。」**次へ**をクリックしてレビュータブへ進みます。

インストーラがシステムの推奨設定のリストを表示します。システムに適用しない項目の選択を解除することができます。必須設定はインストール時に自動的に適用されます。

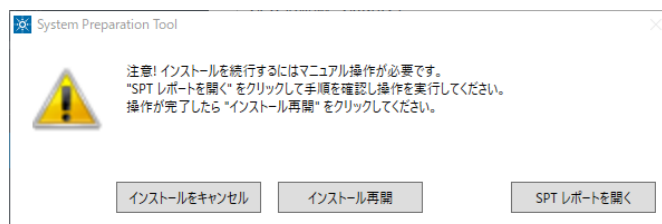
インストールを再開する場合、**【次へ】** をクリックします。

- 8 **【レビュー】** タブに、インストールされるコンポーネントのリストが表示されます。表示される項目は選択したサーバーによって異なります。**【インストール】** をクリックします。

注記

Windows Server 2022 インストールの場合、**次へ**をクリックし、**ステップ 10**へ進みます。

手動で実行する操作がある場合、インストールをキャンセルするか、インストールを再開するか、または SPT レポートを表示するよう促されます。



続行オプション：

- ・ 推奨設定：**【SPT レポートを開く】** をクリックすると、これらの操作を完了するための指示が表示されます。操作が完了したら、**【インストール再開】** をクリックします。
 - ・ インストールを中断するには、**【インストールをキャンセル】** をクリックします。必要な更新を行ってインストールを再開します。
- 9 **【インストール再開】** をクリックすると、このダイアログウィンドウが閉じます。設定が適用されていない場合でもインストールが続行されます。

10 インストールの進捗バーに 100% と表示されたら、**次へ**をクリックします。

11 **終了**をクリックします。

ステップ 2 - データベーススキーマの作成および更新

1 **[ステップ 2 - データベーススキーマの作成および更新]** をクリックします。



2 **[データベースタイプ]** タブで、データベースに使用するサーバーを選択し、**[次へ]** をクリックします。

PostgreSQL Server をインストールする場合は、39 ページの「**PostgreSQL Server の場合**」を参照してください。

Oracle Database Server の場合は、41 ページの「**Oracle Server の場合**」を参照してください。

Microsoft SQL Server をインストールする場合は、42 ページの「**Microsoft SQL Server の場合**」を参照してください。

PostgreSQL Server の場合

デフォルトでは、35 ページの「ステップ 1 - ソフトウェアに必要なコンポーネントのインストールおよびアップグレード」に入力した情報が表示されます。

1 [データベースサーバー] タブで、サーバー名とポートを入力します。

OpenLab Server 用にデータベースを作成するか、既存のデータベースに接続するかを選択します。

- **OpenLab Server に新規データベースを作成：**インストーラが自動的にデータベースを作成する場合は、このオプションを選択します。このオプションには、データベース管理者のユーザー名とパスワードが必要です。
- **既存の OpenLab Server データベースに接続してアップグレード：**提供されている SQL スクリプトを使用してデータベーススキーマを作成済みの場合は、このオプションを選択します。

注記

サーバー名にアンダースコア (_) を使用している場合は、OpenLab Content Management ソフトウェアはインストールされません。

[次へ] をクリックします。

OpenLab Server
データベースウィザード
データベースタイプ
データベースサーバー
データベース認証
スキーマ情報
レビュー
終了

データベースサーバー

PostgreSQL Server の名前または IP を入力してください。

サーバー名

ポート

OpenLab Server 用に新しいデータベースを作成、または既存のデータベースに接続しますか?

☒ OpenLab Server に新規データベースを作成

インストール中に自動的にデータベースを作成する場合はこのオプションを選択します。
注意: このオプションの場合、データベース管理者のユーザー名とパスワードが必要です。

☐ 既存の OpenLab Server データベースに接続してアップグレード

提供されている SQL スクリプトを使用してデータベーススキーマを作成した場合は、そのデータベースに接続してください。

戻る 次へ キャンセル

- 2 [データベース認証] タブで、「**ステップ 1 - ソフトウェアに必要なコンポーネントのインストールおよびアップグレード**」で作成したスーパーユーザーの資格情報が入力されています。スーパーユーザーのパスワードをリセットするには、新しいパスワードを入力し、[スーパーユーザーパスワードのリセット] を選択します。

既存のデータベースに接続している場合、このタブはスキップされます。

[次へ] をクリックします。

- 3 プログラムを実行するには、[**スキーマ情報**] タブの次の 2 つのデータベースが必要です：Content Management と Shared Services

Content Management データベースはコンテンツとインデックスを保存するために使用され、Shared Services データベースはソフトウェア管理およびアクセスコントロールに使用されます。

各データベース用のパスワードを作成します。

Agilent では、デフォルトのデータベースユーザー名を変更しないことをお勧めします。

[次へ] をクリックします。

- 4 [レビュー] タブで、入力情報を確認し、[**データベースの作成**] をクリックします。
- 5 [終了] をクリックします。

Oracle Server の場合

デフォルトでは、35 ページの「ステップ 1- ソフトウェアに必要なコンポーネントのインストールおよびアップグレード」に入力した情報が表示されます。

- 1 [データベースサーバー] タブで、ホスト名、ポート、および SID または サービス名を入力します。

OpenLab Server 用にデータベースを作成するか、既存のデータベースに接続するかを選択します。

- **OpenLab Server に新規データベースを作成：**インストーラが自動的にデータベースを作成する場合は、このオプションを選択します。このオプションには、データベース管理者のユーザー名とパスワードが必要です。
- **既存の OpenLab Server データベースに接続してアップグレード：**提供されている SQL スクリプトを使用してデータベーススキーマを作成済みの場合は、このオプションを選択します。

注記

サーバー名にアンダースコア (_) を使用している場合は、OpenLab Content Management ソフトウェアはインストールされません。

[次へ] をクリックします。

- 2 [データベース認証] タブで、Oracle データベース管理者の資格情報を入力して、OpenLab Content Management データベーススキーマをインストールし、[次へ] をクリックします。

- 3 **【スキーマ情報】** タブの次の 2 つのスキーマが必要です：
Content Management と Shared Services 両方のパスワードを入力し、**【次へ】** をクリックします。
- 4 **【レビュー】** タブで、入力情報を確認し、**【データベースの作成】** をクリックします。

Microsoft SQL Server の場合

デフォルトでは、35 ページの「**ステップ 1 - ソフトウェアに必要なコンポーネントのインストールおよびアップグレード**」に入力した情報が表示されます。

- 1 **【データベースサーバー】** タブで、SQL Server のサーバー名または IP を入力します。次のいずれかを選択します。
 - **デフォルトのインスタンスに接続：**ポート番号を入力します。
 - **名前付きのインスタンスに接続：**インスタンス名を入力します。

OpenLab Server 用にデータベースを作成するか、既存のデータベースに接続するかを選択します。

 - **OpenLab Server に新規データベースを作成：**インストーラが自動的にデータベースを作成する場合は、このオプションを選択します。このオプションには、データベース管理者のユーザー名とパスワードが必要です。
 - **既存の OpenLab Server データベースに接続してアップグレード：**提供されている SQL スクリプトを使用してデータベーススキーマを作成済みの場合は、このオプションを選択します。

注記

サーバー名にアンダースコア () を使用している場合は、OpenLab Content Management ソフトウェアはインストールされません。

[次へ] をクリックします。

- 2 [データベース認証] タブで、認証モードを選択します。SQL Server データベース管理者アカウント (sa) を選択した場合、スーパーユーザーとパスワードを入力します。

[次へ] をクリックします。

- 3 [スキーマ情報] タブに、OpenLab Server データベースに接続するための情報が表示されます。デフォルトのデータベースユーザーを使用することをお勧めします。

[次へ] をクリックします。

- 4 [レビュー] タブで、入力情報を確認し、[データベースの作成] をクリックします。

ステップ 3 - OpenLab Content Management のインストールおよびアップグレード

ソフトウェアをアップグレードする前に、クライアントからのアップロードをすべて停止し、クライアント上のファイルアップロードキューを空にしてください。

- 1 [ステップ 3 - OpenLab Content Management のインストールおよびアップグレード] をクリックします。



- 2 [使用許諾契約書] タブで、ライセンス条項を確認して、同意し、[次へ] をクリックします。
- 3 [インストールフォルダー] タブで、[インストールフォルダー] を選択し、[次へ] をクリックします
- 4 [レビュー] タブに、インストールされるコンポーネントが表示されます。インストールを開始するには、[インストール] をクリックします。
- 5 [インストール] タブに、インストールのステータスが表示されます。インストールが完了したら、[次へ] をクリックします。
- 6 [終了] タブで、[ソフトウェアベリフィケーションの実行] をクリックして、ソフトウェアが正しくインストールされたことを確認し、[終了] をクリックします。

ステップ 4 - OpenLab Content Management の構成

OpenLab Content Management のコンフィグレーションユーティリティを使用して、OpenLab Content Management のサーバーを、スタンドアローンまたはクラスタに構築または再構築します。

- 1 **「ステップ 4 - OpenLab Content Management の構成」** をクリックします。



- 2 すでに OpenLab Server または OpenLab ECM XT のインストールを行い、設定をコンフィグレーションファイルとして保存している場合は、コンフィグレーションファイルを **ようこそ** タブでインポートし、設定を再利用することができます。**「次へ」** をクリックします。
- 3 **「データベースタイプ」** タブで、使用するデータベースのタイプを選択し、**「次へ」** をクリックします。デフォルトでは、35 ページの **「ステップ 1 - ソフトウェアに必要なコンポーネントのインストールおよびアップグレード」** からの選択が表示されます。
- 4 **「データベースサーバー」** タブで、コンフィグレーションの **サーバー情報** を入力します。
「確認」 をクリックして、コンフィグレーションされたサーバー情報を確認し、**「次へ」** をクリックします。
- 5 **「スキーマ情報」** タブで、OpenLab Server のデータベース名と認証情報を入力します。
「確認」 をクリックして、コンフィグレーションされたサーバー情報を確認し、**「次へ」** をクリックします。

6 [サーバー設定] タブで、設定情報を入力します。

- オールインワンシステムコンフィグレーションを使用する場合は、**Content Management（インデックスおよび検索サービスを含む）**を選択します。デフォルトは、この選択です。
- 拡張可能（スケーラブル）なシステムトポロジーマたは 4 サーバートポロジーを使用し Content Management ウェブサービスを実行するサーバーを作成する場合は、**Content Management のみ**を選択します。
- 拡張可能（スケーラブル）なシステムトポロジーマたは 4 サーバートポロジーを使用し インデックスおよび検索サービスを実行するサーバーを作成する場合は、**インデックスおよび検索サービスのみ**を選択します。Content Management がインストールされたサーバーの完全修飾ドメイン名を入力し、**[確認]** をクリックします。詳細については 50 ページの「**OpenLab インデックスサーバーのインストールおよび構成**」を参照してください。

[次へ] をクリックします。

7 [アクセス資格情報] タブで、アカウントのアクセス資格情報を入力します。4 サーバートポロジーマたは、スケーラブルトポロジーマたは外部の PostgreSQL データベースサーバーを使用する場合、Windows ドメインユーザーを 23 ページの「**ステップ 2 - カスタムユーザーの設定**」で作成したサービスアカウントとして使用します。

このユーザーは「サービスとしてログオン」権限を持っている必要があります。

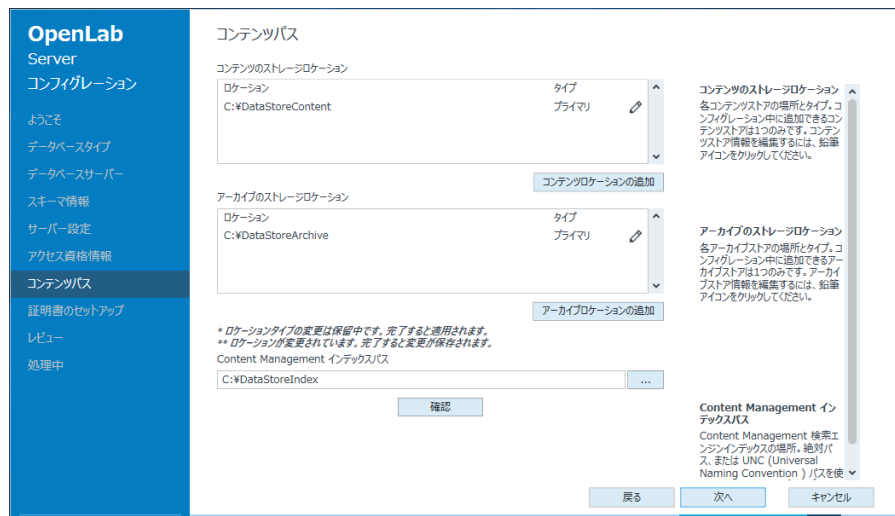
[確認] をクリックして、資格情報を確認し、**[次へ]** をクリックします。

8 [コンテンツパス] タブで、コンテンツストレージ、アーカイブストレージ、およびインデックスロケーションの情報を確認します。

- すべてのロケーションパスは一意にしてください。たとえば、コンテンツロケーションとアーカイブロケーションに同じパスを使用することはできません。
- UNC パスが使用されている場合、マニュアルでパスを確認する必要があります。この確認では、ユーザーに UNC パスの読み取り、および書き込みアクセス権があるかどうかは確認しません。
- サーバーが **Content Management のみ**または**インデックスおよび検索のみ**としてコンフィグレーションされている場合、すべてのサーバーでコンテンツストレージロケーション用の共有ストレージロケーションの UNC パスを使用するよう同じコンテンツストレージロケーションをコンフィグレーションしてください。

OpenLab ソフトウェアのインストール

ステップ 4 - OpenLab Content Management の構成



コンテンツまたはアーカイブのストレージロケーションを編集するには、

- ロケーションの **【編集】** アイコン（鉛筆）をクリックします。
- ロケーション情報を必要に応じて編集し、**【完了】** をクリックします。

ダブルアスタリスク (**) インジケーターがロケーションの名前の横に表示されます。

新しいコンテンツまたはアーカイブのストレージロケーションを追加するには、

- 【コンテンツロケーションの追加】** または **【アーカイブロケーションの追加】** をクリックします。新しいロケーションは一度に 1 つしか追加できません。
- ロケーションのタイプとして、ファイルシステムまたは Amazon S3 (AWS S3) を選択します。
- 必要な情報を入力します。S3 の場合、追加する前にロケーションを作成しアクセス可能にする必要があります。必要な権限および最適な方法については、28 ページの **「Amazon Web Service S3 の準備」** を参照してください。
- ロケーションを追加してロケーションリストに戻るには、**【完了】** をクリックします。新しいロケーションの追加をキャンセルするには、**【キャンセル】** をクリックします。

新しいロケーションが、リストの最初のアイテムとして表示されます。ロケーションタイプ（プライマリ）の横にアスタリスク(*)が表示され、この新しいロケーションがファイルの書き込み先となることが示されます。

この新しいロケーションを削除するには、[削除] アイコン（ゴミ箱）をクリックします。

前のプライマリロケーションのロケーションタイプの横にアスタリスク(*)が表示されます。これは、このロケーションがセカンダリ（secondary）と見なされ、読み取り専用になっていることを示します。このロケーションからデータを取得できますが、新しいデータを保存することはできません。

コンテンツロケーションおよびアーカイブロケーション用の以下のストレージロケーションの組み合わせが Amazon S3 でサポートされています。

表 8 ストレージロケーションの組み合わせ

プライマリ	セカンダリ
S3	on-prem
on-prem	on-prem
S3	(セカンダリなし)

サーバーがインデックスおよび検索を含む **Content Management** か、インデックスおよび検索のみのサーバーとしてコンフィグレーションされている場合は、インデックスロケーションがローカルパスになります。

サーバーが **Content Management のみ** のサーバーとしてコンフィグレーションされている場合は、パスの代わりに OpenLab インデックスサーバーのホスト名が提供されます。確認時に OpenLab インデックスサーバーの電源が投入されている必要があり、ICMP エコー要求が許可されていなければなりません。

[確認] をクリックして、ロケーションを確認し、[次へ] をクリックします。

- 9 [証明書のセットアップ] タブで、Agilent OpenLab 内部証明書がデフォルトでインストールされます。インストールされていない場合、[既存のカスタム証明書を使用する] を選択し、証明書情報を入力します。[次へ] をクリックします。証明書の作成については、『OpenLab Server/ECM XT 管理者ガイド』を参照してください。

注記

新規インストール時に、カスタム証明書の使用を選択することはできません。この選択は、インストール後のサーバーの再コンフィグレーション時のみ可能です。

10 [レビュー] タブで、サーバーコンフィグレーションサマリーをレビューします。コンフィグレーションファイルを保存するには、**[エクスポート]** をクリックします。コンフィグレーションを適用するには、**[適用]** をクリックします。

11 コンフィグレーションが完了したら、**[完了]** をクリックします。

ソフトウェアをアップグレードした場合、OpenLab Shared Services アクティビティログインデックスの再構築プロセスがバックグラウンドで続行されます。インデックスの再構築に要する時間は、データベースのタイプとアクティビティログレコード数によって異なります。処理には数時間かかることもあります。処理中は、アプリケーションでアクティビティログの検索はできません。

OpenLab インデックスサーバーの インストールおよび構成

4 サーバースystemの場合、以下の手順で OpenLab インストーラを使用してインデックスサーバーをインストールしてください。

- 1 35 ページの「**ステップ 1 - ソフトウェアに必要なコンポーネントのインストールおよびアップグレード**」を実行し、説明に従って必須のソフトウェアをすべてインストールします。
- 2 PostgreSQL データベースを使用している場合は、44 ページの「**ステップ 3 - OpenLab Content Management の インストールおよびアップグレード**」に進みます。そうでない場合は、38 ページの「**ステップ 2 - データベーススキーマの作成および更新**」を実行します。リモートデータベースサーバーを選択し、**[既存の OpenLab Server データベースに接続してアップグレード]**を選択します。説明に従ってこのステップを終了します。このステップで設定した情報を記録します。
- 3 44 ページの「**ステップ 3 - OpenLab Content Management の インストールおよびアップグレード**」を実行し、説明に従って OpenLab ソフトウェアコンポーネントをインストールします。
- 4 45 ページの「**ステップ 4 - OpenLab Content Management の構成**」を実行し、説明に従ってコンフィグレーションを終了します。
 - **サーバー設定画面で、[インデックスおよび検索サービスのみ]**を選択します。プライマリ OpenLab Server/ECM XT サーバーの FQDN を入力し、接続を確認します。
 - **アクセス資格情報画面で、Windows ドメインユーザーをサービスアカウントとして使用します。**
 - **コンテンツパス画面で、**
 - コンテンツストレージロケーション用の共有ストレージロケーションの UNC パスを使用するようにコンテンツストレージロケーションを編集します。
 - アーカイブストレージロケーション用の共有ストレージロケーションの UNC パスを使用するようにアーカイブストレージロケーションを編集します。
 - Content Management インデックスパス用の OpenLab インデックスサーバーのローカルドライブを使用します。
 - **証明書のセットアップ画面で、[Content Management ホストの内部証明書を使用]**を選択します。

- 5 AlfrescoTomcat JVM および SearchService JVM で要求されるメモリに更新します（52 ページの「**Java 仮想マシンのチューニング**」を参照）。たとえば、メモリが 32 GB の OpenLab Content Management サーバーの場合、検索サービスの JVM サイズを 16 GB に設定します。AlfrescoTomcat JVM を 8 GB に設定します。
- 6 Windows サービスから OpenLab Shared Services サービスを停止し無効にします。

Java 仮想マシンのチューニング

OpenLab Server/ECM XT では Apache Tomcat サーバーを使用しており、このサーバーは Java 仮想マシン（JVM）で実行しています。パフォーマンスとメモリ管理を最適化するために、JVM をチューニングする必要があります。

- 1 **OpenLab サーバーで、コマンドプロンプトを管理者として実行で開きます。**
- 2 OpenLab Server/ECM XT Server をコンフィグレーションします。
 - a コマンドプロンプトから、 **C:¥Program Files (x86)¥Agilent Technologies¥OpenLab Data Store ¥tomcat¥bin** に移動します。
 - b コマンドラインに、以下を入力します。
`tomcat8w.exe //ES//AlfrescoTomcat`
 - c **[alfrescoTomcat properties]** ウィンドウで、**[Java]** タブを選択します。
 - d **Java Options** で、**-Xmx** の値をサーバーのメモリに応じて更新します。
- 3 検索サービスをコンフィグレーションします。
 - a コマンドプロンプトから、 **C:¥Program Files (x86)¥Agilent Technologies¥Content Management Search Services¥solr¥server** に移動します。
 - b コマンドラインに、以下を入力します。
`SolrService.exe //ES//SearchService`
 - c **[Content Management Search Service properties]** ウィンドウで、**[Java]** タブを選択します。
 - d **Java Options** で、**-Xmx** の値をサーバーのメモリに応じて更新します。
- 4 以下のサービスを再起動します。
 - alfrescoTomcat
 - Content Management Search service

表 9 オールインワンシステム用の JVM チューニング

サーバーメモリ	OpenLab Server/ECM XT Server の JVM	検索サービスの JVM
12 GB	-Xmx2048m	-Xmx2048m
16 GB	-Xmx3276m	-Xmx4916m
24 GB	-Xmx4096m	-Xmx8192m
32 GB	-Xmx6g	-Xmx10g
48 GB	-Xmx8g	-Xmx16g
64 GB 以上	メモリの半分を使用し、ECM XT Server と検索サービスの JVM との間で容量を 40/60 に分割します（-Xmx12g と -Xmx20G など）。	

表 10 2 サーバーソリューション用の JVM チューニング

サーバーメモリ	OpenLab Server/ECM XT Server の JVM	検索サービスの JVM
32 GB	-Xmx8g	-Xmx16g
48 GB	-Xmx16g	-Xmx24g
64 GB 以上	システム用に 8G を維持し、OpenLab Server/ECM XT Server と Search Service JVM との間で残量を 40/60 に分割します（-Xmx20g と -Xmx32G など）。	

表 11 4 サーバーソリューション用の JVM チューニング

OpenLab Content Management サーバーのメモリ	OpenLab Server/ECM XT Server の JVM	
24 GB	-Xmx16g	
64 GB 以上	システム用に 8 GB を維持し、OpenLab Server/ECM XT Server に残量を割り当てます（64 GB サーバーの場合、-Xmx56g など）。	

OpenLab インデックスサーバーの メモリ	OpenLab Server/ECM XT Server の JVM	検索サービスの JVM
32 GB	-Xmx8g	-Xmx16g
64 GB 以上	システム用に 8 GB を維持し、OpenLab Server/ECM XT Server と Search Service JVM との間で残量を 40/60 に分割します（-Xmx20g と -Xmx32g など）。	

表 12 スケーラブルシステム用の JVM チューニング

OpenLab Content Management サーバーのメモリ		OpenLab Server/ECM XT Server の JVM	
24 GB		-Xmx16g	
64 GB 以上		システム用に 8 GB を維持し、OpenLab Server/ECM XT Server に残量を割り当てます (64 GB サーバーの場合、-Xmx56g など)。	

OpenLab インデックスサーバーの メモリ		OpenLab Server/ECM XT Server の JVM	検索サービスの JVM
32 GB		-Xmx8g	-Xmx16g
64 GB 以上		システム用に 8 GB を維持し、OpenLab Server/ECM XT Server と Search Service JVM との間で残量を 40/60 に分割します (-Xmx20g と -Xmx32g など)。	

3

OpenLab Content Management サービスのインストール

サードパーティツールの準備 56

Adobe Reader のインストール 56

Content Management サービスのインストール 57

ここで、サーバーに接続するクライアントのインストール手順を説明します

Agilent OpenLab CDS を使用しているときは、OpenLab Content Management 用サービスをインストールする必要はありません。

ソフトウェアをアップグレードする前に（44 ページの「**ステップ 3 - OpenLab Content Management のインストールおよびアップグレード**」）、クライアントからのアップロードをすべて停止し、クライアント上のファイルアップロードキューを空にしてください。

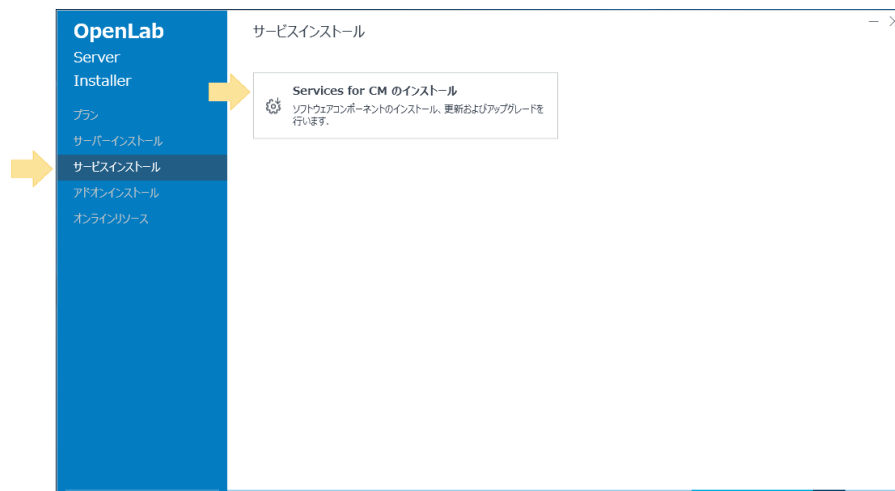
サードパーティツールの準備

Adobe Reader のインストール

Adobe Reader は、インターネットからダウンロードしてインストールできます。

Content Management サービスのインストール

- 1 ソフトウェアパッケージから、**setup.exe** ファイルを右クリックして、管理者としてファイルを実行します。ユーザーアカウント制御（UAC）をオンにしている場合は、作業の続行を明示的に確認しなければなりません。OpenLab インストーラを起動するには、**setup.exe** を実行します。
- 2 **[OpenLab Server/ECM XT]** を選択し、**[OK]** をクリックします。
- 3 **[サービスインストール]** > **[Services for CM のインストール]** を選択します。



- 4 **[使用許諾契約書]** の条項を読みます。インストールウィザードでは、メインメニューの **[ドキュメント]** 画面に印刷可能な使用許諾契約書の PDF ファイルがあります。
[規約に同意します] を選択します。この条項に同意しない限りインストールを開始できません。
[次へ] をクリックします。
- 5 **[インストールフォルダー]** タブで、フォルダー名を入力するか、アプリケーションコンポーネントの保存先フォルダーに移動し、**[次へ]** をクリックします。
- 6 **[サーバー情報]** タブで Shared Services サーバーのホスト名を入力し、**[接続]** をクリックします。**[次へ]** をクリックします。

- 7 **【システム準備】** タブは、Windows の必須および推奨設定が適用されます。

インストーラがシステムの推奨設定のリストを表示します。システムに適用しない項目の選択を解除することができます。必須設定はインストール時に自動的に適用されます。

【次へ】 をクリックします。

- 8 **【終了】** タブの **【終了】** をクリックします。システムの再起動を促される場合があります。

正常にインストールされると、次の URL から OpenLab Content Management のウェブインターフェイスにアクセスできるようになります：

https://<<server>>/datastore/。<<server>> は、OpenLab Server/ECM XT がインストールされたサーバーアドレスです。

コントロールパネルへのアクセス	60
ユーザーの作成	61
ユーザーの追加（内部認証の場合）	61
ユーザーのインポート（Windows ドメイン認証の場合）	63
ロールへユーザーを追加	64
ライセンスの取得	67
ソフトウェアライセンスをオンラインで取得	67
SubscribeNet アカウントの作成（新規ユーザーのみ）	68
ライセンスの作成	68
オフラインのライセンスソフトウェアの取得	70
ライセンスのインストール	71

コントロールパネルへのアクセス

- 1 デスクトップの [コントロールパネル] ショートカットをダブルクリックするか、[スタート] > [Agilent Technologies] > [コントロールパネル] の順に選択します。



- 2 インストール中、自動的に OpenLab Content Management サーバーが有効となり、デフォルトユーザーによる内部認証を使って設定されます。

ユーザー **admin**、パスワード **openlab** としてログインします。

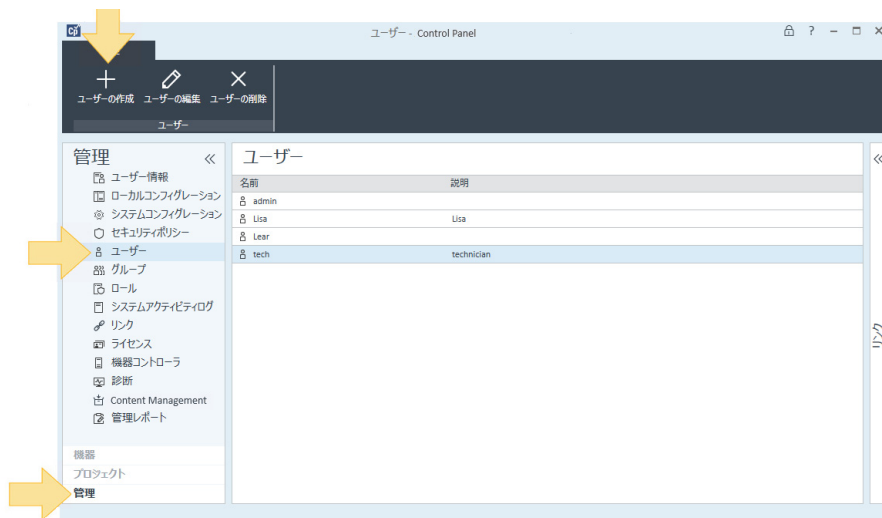
初めてログインする場合、先に進む前にシステムがユーザーにパスワードの変更を求めます。ここで認証モードを変更できます。

詳細については、コントロールパネルのオンラインヘルプを参照してください。

ユーザーの作成

ユーザーの追加（内部認証の場合）

- 1 [管理] > [ユーザー] > [ユーザーの作成] をクリックします。



- 2 ユーザーの [名前] と [説明] を入力します。
- 3 ユーザーの [パスワード] を入力します。パスワードの確認をします。パスワードの長さは、[セキュリティポリシー] で定義されています。

コントロールパネルの設定

ユーザーの追加（内部認証の場合）

- 4 ユーザーの **【フルネーム】**、**【電子メール】**、および必要に応じて **【連絡先情報】** を入力します。フルネームは、アクティビティログのエントリおよびコントロールパネルの右下のウェルカムメッセージで使用されます。

ユーザーの作成

名前 (ID): John Smith

説明:

一般 グループメンバーシップ ロールメンバーシップ

パスワード: ●●●●

パスワードの確認: ●●●●

フルネーム: John Smith

電子メール: john_smith@xxx.xxx

連絡先情報:

☒ ユーザーは次回ログイン時にパスワードの変更が必要

☐ ユーザーはパスワードを変更できない

☐ パスワードを無期限にする

☐ アカウントを無効にする

☐ アカウントがロックされています

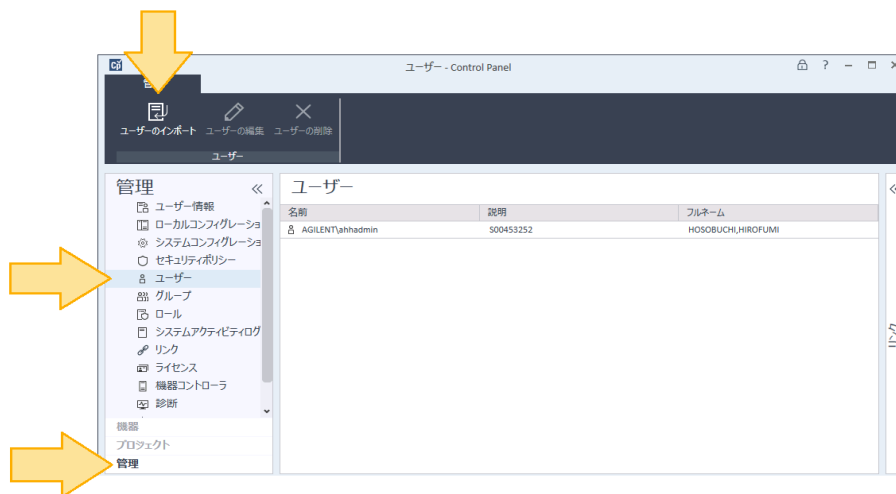
OK キャンセル

- 5 パスワードのオプションを選択します。
- 割り当てられたパスワードをユーザーが変更できないようにするには、**【ユーザーはパスワードを変更できない】** を選択します。
 - ユーザーが次回ログインするときにパスワードを作成するよう設定するには、**【ユーザーは次回ログイン時にパスワードの変更が必要】** を選択します。
 - ユーザーが割り当てられたパスワードを使用、または随時変更できるようにするには、**【ユーザーはパスワードを変更できない】** および **【ユーザーは次回ログイン時にパスワードの変更が必要】** をオフにします。
 - パスワードが期限切れにならないように設定するには、**【パスワードを無期限にする】** を選択します。
- 6 ユーザープロフィールを作成するけれども、そのユーザーがコントロールパネルにログインできないようにするには、**【アカウントを無効にする】** を選択します。
- 7 **【OK】** をクリックします。

ユーザーのインポート（Windows ドメイン認証の場合）

システムにユーザーをインポートするには、ドメインからユーザーとグループ情報を取得する権限を持っている必要があります。

- 1 [管理] > [ユーザー] > [ユーザーのインポート] をクリックします。



- 2 ドメインまたはローカルコンピュータ内を検索し、認証済み OpenLab ユーザーのリストにユーザーを追加します。コントロールパネルにログインするには、ドメインのパスワードが必要となります。
- 3 [OK] をクリックします。

ロールへユーザーを追加

OpenLab Content Management ユーザーのロールと権限を管理するには、コントロールパネルを使用します。ユーザーに Content Management ユーザーインターフェイスへの各種のアクセスを許可するには、カスタムロールを作成するか、以下の定義済み OpenLab Content Management ロールを割り当てます。

権限	Content Management のロール
プロジェクト：プロジェクトまたはプロジェクトグループの表示 コントロールパネルでプロジェクトを表示。 Content Management コンテンツを表示、 プレビュー、ダウンロード	- Content Management 閲覧者 - Content Management 投稿者 - Content Management 承認者 - Content Management 管理者 - アーキビスト - システム管理者 - すべて
プロジェクト：プロジェクトコンテンツの編集ファイルとフォルダーの作成、更新、およびコピー	- Content Management 投稿者 - Content Management 承認者 - Content Management 管理者 - システム管理者 - すべて
プロジェクト：データファイルの電子署名 ファイルに電子署名を適用	- Content Management 承認者 - システム管理者 - すべて
プロジェクト：プロジェクトコンテンツの削除 プロジェクトに関連するファイルとフォルダーの削除および移動	- Content Management 管理者 - すべて
管理：テンプレート管理 フォルダーへの PDF テンプレートの適用	- Content Management PDF テンプレートの管理 - すべて
管理：コンテンツのアーカイブ ファイルとフォルダーのオンラインアーカイブ、デアーカイブ、および自動アーカイブタスクの設定	- アーキビスト - すべて
管理：セキュリティの管理 ユーザー、グループ、ロールを作成。セキュリティロールを割り当て。Content Management 内のファイルおよびフォルダーを移動、削除	- システム管理者 - すべて
管理：アクティビティログの表示 アクティビティログへのアクセス	- アクティビティログのアクセス - システム管理者 - すべて

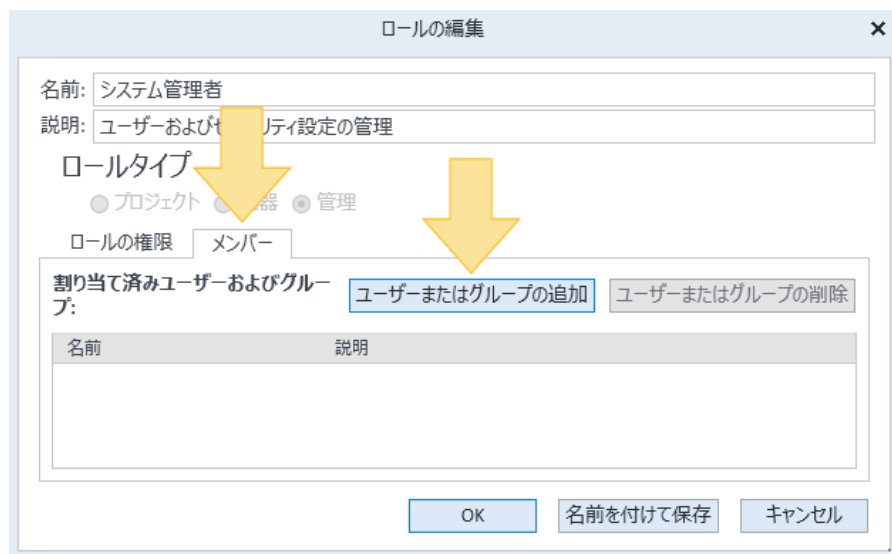
コントロールパネルの設定

ロールへユーザーを追加

- 1 [管理] > [ロール] をクリックします。
- 2 ユーザーに割り当てるロールを選択し、[ロールの編集] をクリックします。



- 3 [ユーザーまたはグループの追加] をクリックします。



コントロールパネルの設定

ロールへユーザーを追加

- 4 検索する文字列を入力して **【検索】** をクリックし、システム内のユーザーとグループのリストを表示します。
- 5 ユーザーまたはグループを選択し、**【追加】** をクリックします。

ユーザーおよびグループの検索

ここで、以前に作成またはインポートしたユーザーおよびグループを検索できます。

検索文字列の入力

admin

検索

検索結果

名前	ドメイン
admin	

追加

ユーザーとグループの選択

名前	ドメイン
----	------

削除

OK キャンセル

- 6 **【OK】** をクリックします。

ライセンスの取得

ライセンスファイルには、お客様のソフトウェアライセンスが含まれます。このファイルは、ライセンスサーバー、ワークステーションコンピューター、または製品のインストール先の Shared Services サーバーにインストールされます。ライセンスファイルは、サーバーアドレスに固定されており、別のサーバーに移動することはできません。

ライセンスファイルは、接続するデータシステムの種類、セキュリティで保護されたストレージに保存するファイルの種類、接続できる機器の数、および Content Management インターフェイスで特定のアクティビティにアクセスして実行する機能を定義します。

ソフトウェアライセンスをオンラインで取得

ライセンスを維持管理する最も効率的な方法は、インターネットを使用することです。ただし、インターネットに接続できない場合は、70 ページの「**オフラインのライセンスソフトウェアの取得**」を参照してください。

薄紫色の封筒には、Software Entitlement Certificate（ソフトウェアライセンス証明書）が入っています。この証明書で、次の情報を確認してください。薄紫色の封筒を受け取っていない場合は、販売店またはサポート担当者に問い合わせてください。

- Authorization code（認証コード）
- SubscribeNet の URL

SubscribeNet アカウントの作成（新規ユーザーのみ）

SubscribeNet にまだ登録していないユーザーの場合は、まず、アカウントを作成する必要があります。

SubscribeNet に登録済みの場合は、**Generate your License** セクションに進んでください。

- 1 インターネットにアクセスできるコンピュータから、インターネットブラウザに SubscribeNet URL を入力します。
- 2 **[click HERE to register]** をクリックします。
- 3 ラベルから認証コードを入力し、プロフィール情報を入力します。ここで入力する電子メールアドレスが、ログイン ID になります。
- 4 **[Submit]** をクリックします。

アカウント名が作成および表示されます。また、システムにより、以下の情報が入力した電子メールアドレスに送信されます。

- アカウント名
- ログイン ID
- パスワード
- SubscribeNet サイトのライセンスプールにアクセスするためのリンク

ライセンスの作成

- 1 OpenLab Content Management サーバーから SubscribeNet のサイトを開きます。
- 2 ログイン ID とパスワードを使用して SubscribeNet にログインします。
- 3 複数のアカウントがある場合は、Authorization Code（認証コード）に関連している SubscribeNet アカウントを選択します。

- 4 左側のナビゲーションバーから **[Generate licenses]** をクリックし、指示に従って新しいライセンスを作成します。
 - コンピュータの **[HOST NAME]** は、コントロールパネルが実行されているコンピュータのネットワーク名と同一にする必要があります。ホスト名には、DNS サフィックス (domain.com) を含めないでください。ライセンスのインストール後にコンピュータ名またはドメインが変更された場合、このライセンスを削除し、SubscribeNet で新しいライセンスを作成して、ダウンロードおよびインストールする必要があります。
 - MAC アドレスは、Shared Services サーバーのアドレスです。MAC アドレスを取得するには、コントロールパネルのオンラインヘルプトピック、**[ライセンスサーバーの管理]** > **[MAC アドレスのコピー]** を参照してください。ライセンス作成時に使用した MAC アドレスを持つネットワークアダプタがマシンから外されると、お使いのライセンスは有効ではなくなります。新しいライセンスは、ライセンスサーバー上で現在利用可能な MAC アドレスを使用して作成する必要があります。
- 5 ライセンスが作成されたら、**[Download License File]** をクリックし、使用するコンピュータとバックアップのロケーション（移動可能な記憶装置など）にライセンスファイルを保存します。

オフラインのライセンスソフトウェアの取得

インターネットに接続できない場合は、お客様自身またはローカルオンサイトサービスエンジニアが必要な情報を収集し、Agilent がお客様に代わってライセンスアカウントを作成します。

1 必要なお客様情報

- 会社名
- ラボラトリー / 部門名
- 名および姓
- 電子メールアドレス
- 電話番号
- 国名、郵便番号、都道府県名、市町村名を含めた住所
- Software Entitlement Certificate が入った薄紫色の封筒で提供される認証コードラベル。

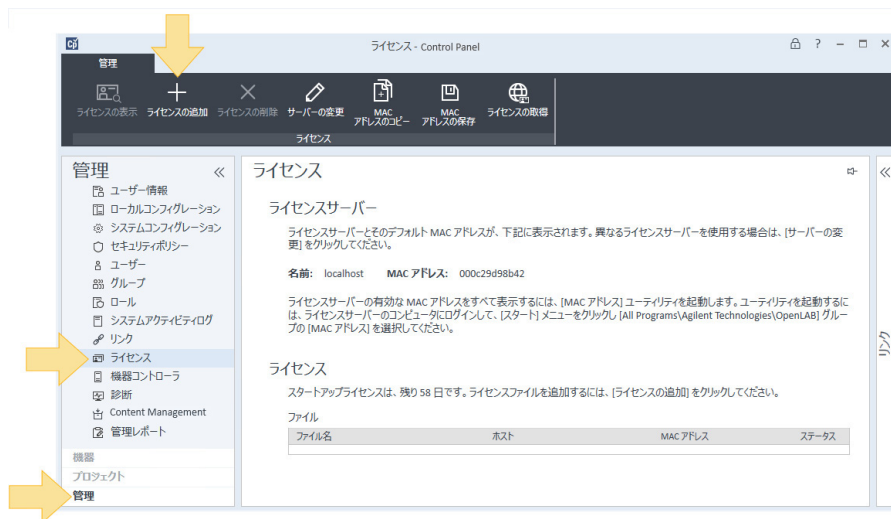
2 お近くの販売店またはサービスセンターにご連絡ください。

必要な情報をご提供いただいた後、Agilent ではお客様の代理で SubscribeNet 経由でライセンスを作成します。ライセンスファイルは、発送先住所に CD で送付されるか、または現地の FSE が USB メモリでお届けします。

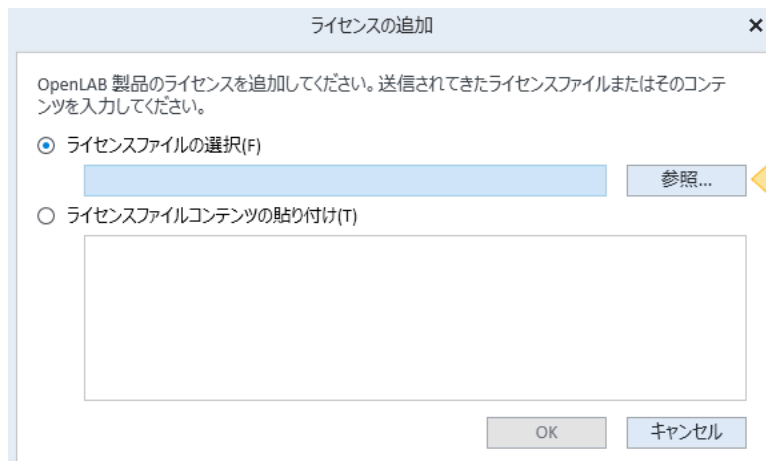
ライセンスのインストール

システムが正しく機能するためには、ライセンスをコントロールパネルに追加する必要があります。

- 1 デスクトップの **【コントロールパネル】** ショートカットをダブルクリックするか、**【スタート】 > 【Agilent Technologies】 > 【コントロールパネル】** の順に選択します。
- 2 **【管理】 > 【ライセンス】 > 【ライセンスの追加】** をクリックします。



- 3 [参照] をクリックします。



- 4 ライセンスファイルのロケーション（CD、USB、またはネットワークフォルダー上）に移動してファイルを選択し、【開く】をクリックします。
- 5 【OK】をクリックします。
- 6 すべてのノードで AlfrescoTomcat サービスを再開します。

注記

システムに個別のインデックスサーバーが含まれる場合、ライセンスのインストール後にインデックスサーバーを再起動してください。

5

OpenLab ECM XT アドオンのインストール

OpenLab インストーラの起動 **74**

Adobe Acrobat プラグイン PDF テンプレートのインストール **74**

Import Scheduler のインストール **76**

Import Services のインストール **76**

ここでは、OpenLab ECM XT アドオンのインストール手順を説明します。

アドオンは、ECM XT ライセンスで OpenLab Server が起動しているシステムにのみインストールできます。CM サービスのトポロジにアドオンをインストールすることもできます。

OpenLab インストーラの起動

OpenLab ECM XT アドオンソフトウェアは、OpenLab インストーラを使用してインストールします。OpenLab インストーラを起動するには、OpenLab ECM XT ソフトウェアメディアをローカルドライブにコピーし、**Setup.exe** を実行します。

Adobe Acrobat プラグイン PDF テンプレートのインストール

PDF テンプレートプラグインを使用して、OpenLab Content Management のファイルおよびフォルダーに適用できる PDF テンプレートを作成します。
『*Agilent OpenLab Server* および *OpenLab ECM XT* ハードウェアおよびソフトウェア要件ガイド』を参照してください。

注記

Adobe Acrobat 32 ビットフォーマットのみ PDF テンプレートプラグインと互換性があります。Adobe Acrobat 64 ビットフォーマットはサポートされていません。Adobe Acrobat 32 ビットがインストールされていることを確認してください。Acrobat Standard DC 32 ビットをインストールするには、次のリンク <https://helpx.adobe.com/acrobat/kb/acrobat-dc-downloads.html> を使用してください。**Windows 用 Acrobat Standard DC インストーラ**を選択し、Adobe が提供する説明に従ってください。その他すべてのリンク（ユーザーアカウントからのリンクなど）では、サポートされない 64 ビットフォーマットがインストールされます。

PDF テンプレートプラグインをインストールする前に、サポートする Adobe Acrobat Professional がインストールされている必要があります。

- 1 Adobe Acrobat Standard DC で、保護モードをオフにします。
 - a アカウントアイコンをクリックし、**【環境設定】** を選択します。
 - b **【セキュリティ (拡張)】** カテゴリーを選択し、**【起動時に保護モードを有効にする】** をオフにします。
- 2 **【アドオンインストール】** 画面から、**【Adobe PDF テンプレートのインストール】** をクリックします。

- 3 **【規約に同意します】** を選択します。この条項に同意しない限りインストールを開始できません。**【次へ】** をクリックします。
- 4 **【インストールプレビュー】** を確認し、**【インストール】** をクリックします。
- 5 インストールが完了したら、**【次へ】** をクリックします。
- 6 インストールが完了したら、システムを再起動することをお勧めします。**【コンピュータを再起動】** を選択し、**【終了】** をクリックしてインストーラを終了します。

注記

PDF テンプレートプラグインのインストール後、Agilent では Adobe Acrobat Standard DC の自動更新をオフにすることをお勧めします。Adobe Acrobat Standard DC の更新が自動的にインストールされると、PDF テンプレートに対して予期しない設定が作成され機能が停止する原因となることがあります。自動更新をオフにするには、Adobe Acrobat Standard DC でアカウントアイコンをクリックし、**【環境設定】** を選択します。**【アップデーター】** カテゴリーを選択し、**【自動的にアップデートをインストールする】** をオフにします。

トラブルシューティング

Adobe Acrobat が自動的に更新されると、最新の更新によって Adobe Acrobat Standard DC の保護モードがオンになります。これにより Adobe Acrobat がインストール済みの PDF テンプレートプラグインとの動作を停止することがあります。

この状況が発生した場合は、PDF テンプレートプラグインをアンインストールし、Adobe Acrobat Standard DC の保護モードをオフにしてから、PDF テンプレートプラグインを再インストールしてください。

- 1 PDF テンプレートプラグインをアンインストールします。
 - a **Windows コントロールパネル**を開き、**【プログラムと機能】** をクリックします。
 - b **【Agilent OpenLab ECM XT PDF Templates Plug-In】** を右クリックし、**【アンインストール】** を選択します。
 - c **【OpenLab ECM XT PDF テンプレート アンインストール】** ダイアログで、**【アンインストール】** をクリックします。
 - d アンインストールが完了したら **【終了】** をクリックします。
- 2 74 ページの「**Adobe Acrobat プラグイン PDF テンプレートのインストール**」の説明に従って保護モードをオフにし、PDF テンプレートプラグインをインストールします。

Import Scheduler のインストール

Import Scheduler アドオンプログラムによって、分析データの OpenLab Content Management への転送を自動化します。

このアドオンのインストールの情報については、『*Agilent OpenLab ECM XT Import Scheduler* インストールガイド』を参照してください。

Import Services のインストール

Import Services プログラムを使用して、ローカルフォルダーから OpenLab Content Management へ直接簡単にファイルをインポートできます。

- 1 **【アドオンインストール】** ページで、**【Import Services のインストール】** をクリックします。
- 2 **【規約に同意します】** を選択します。この条項に同意しない限りインストールを開始できません。
- 3 デフォルトの**インストールパス**を維持するか、フォルダー名を入力するか、アプリケーションコンポーネントの保存先フォルダーに移動し、**【次へ】** をクリックします。
- 4 **【インストールレビュー】** を確認し、**【インストール】** をクリックします。
- 5 インストールが完了したら、**【次へ】** をクリックします。
- 6 インストールが完了したら、システムを再起動することをお勧めします。**【コンピュータを再起動】** を選択し、**【終了】** をクリックしてインストーラを終了します。

6

インストール後のタスク

ウィルス対策プログラムの設定 78

Trend Micro ウィルス対策ソフトウェアの設定 79

ソフトウェアベリフィケーションの起動 82

ソフトウェアベリフィケーションツールについて 82

ソフトウェアベリフィケーションツールの実行 83

Windows Server 2022 インストールの場合 84

Windows Server 2022 インストール 84

この章では、インストール終了後に行うタスクについて説明します。

ウイルス対策プログラムの設定

- 1 11 ページの「**サーバーコンピューター（複数可）のセットアップ**」に記載されたファイアウォールポートを開きます。
- 2 以下のフォルダーをウイルス対策スキャンから除外する必要があります。これらのフォルダーをスキャンする場合は、システムが測定中やデータ解析の実行中でないときにスキャンしてください。スキャンによって動作が遅くなったり、ウイルス対策プログラムと CDS アプリケーションが同じファイルへ同時アクセスすることで分析が中断されたりすることがあるためです。
 - C:\%DSDData%\DsArchive
 - C:\%DSDData%\DsContent
 - C:\%DSDData%\DsIndex
 - C:\%Program Files (x86)%\Agilent Technologies
 - C:\%ProgramData%\Agilent
 - C:\%ProgramData%\Agilent IPB Files
 - C:\%ProgramData%\Agilent Technologies
 - C:\%ProgramData%\ChromatographySystem
 - C:\%ProgramData%\firebird
 - C:\%ProgramData%\IsolatedStorage

除外するフォルダーの設定方法は、使用しているウイルス対策ソフトウェアのマニュアルを参照してください。

注記

ネットワーク不正侵入防止機能付きのウイルス対策ソフトウェアの場合、一般的なシステムパフォーマンスが多少低下することを想定してください。ネットワーク不正侵入防止機能を無効にするには、使用しているウイルス対策ソフトウェアの説明を参照してください。

Trend Micro ウィルス対策ソフトウェアの設定

OpenLab CDS は、他のウィルス対策プログラムとも併用できます。Trend Micro を使用する場合、システムパフォーマンスを最適化するために以下の設定を推奨します。

- 1 使用している Trend Micro のバージョンに **【Web レピュテーション】** がある場合：パフォーマンス向上のためには、オフにします。

【Web レピュテーション】をオフにすると、ブラウジングを通したマシンの Web トラフィックがチェックされないというリスクがあります。

ゲートウェイレベル上に別の URL/Web スキャナを設定してエンドポイントを保護するか、エンドポイントからインターネットへのアクセスを制限してください。大部分の感染はインターネット Web サイトに由来するため、これらのマシンからアクセスすべきではありません。

- 2 **リアルタイムスキャン**：除外対象を追加し、スキャンを **【作成、変更、または取得されるファイル】** から **【作成または変更されるファイル】** へ変更します。

除外すると Agilent Technologies の作業ディレクトリはスキャンされないため、パフォーマンスが向上します。

リスクとしては、このマシン上で作成および変更されたファイルしかスキャンされません。アクセスしただけのファイルは省略されます。作成時またはマシンへの書き込み時に、気付かずに感染してしまった潜伏ファイルはスキャンされません。

スキャンスケジュールを毎日に増やし、マシン上のすべてのファイルについて感染や潜伏を確認してください。

- 3 **動作の監視**：以下のプログラムリストを **【承認済みプログラム】** に追加します。

- OpenLab¥Services¥Distributed Transaction Coordinator Service¥
Agilent.OpenLab.DistributedTransactionCoordinator.Rest.exe
- OpenLab Backup Utility¥Monitoring Service¥
Agilent.OpenLab.BackupRestore.BackupMonitoringService.exe
- OpenLab Backup Utility¥Notification Service¥
Agilent.OpenLab.BackupRestore.NotificationService.exe
- OpenLab Backup Utility¥Task Status Cache Service¥
Agilent.OpenLab.BackupRestore.TaskStatusCacheService.exe
- OpenLab¥Services¥Electronic Signature Service¥
Agilent.OpenLab.ESignature.Rest.exe

- OpenLab Acquisition¥
Agilent.OpenLab.Acquisition.AcqInstrumentService.exe
 - OpenLab Acquisition¥Agilent.OpenLab.AcquisitionClient.exe
 - OpenLab Data Analysis¥Bin¥
Agilent.Chromatography.DataAnalysis.Processing.ProcessingServer.exe
 - OpenLab Data Analysis¥Bin¥
Agilent.Chromatography.DataAnalysis.UI.CustomCalculationDesigner.exe
 - OpenLab Data Analysis¥Bin¥Agilent.OpenLab.DataAnalysis.exe
 - OpenLab Data Analysis¥Bin¥
Agilent.OpenLab.DataAnalysis.Api.ApplicationService.exe
 - OpenLab Data Analysis¥Bin¥Reporting¥
Agilent.OpenLab.Reporting.RdlDescriptor.exe
 - OpenLab Data Analysis¥Bin¥Reporting¥
Agilent.OpenLab.Reporting.RdlDescriptorContextMenu.exe
 - OpenLab Data Analysis¥Bin¥Reporting¥
IntelligentReporting.RenderServiceHost.exe
 - OpenLab Data Analysis¥Bin¥Reporting¥TemplateDocumentation.exe
 - OpenLab Platform¥Data Repository¥Data Repository¥Base¥BaseService¥
Agilent.OpenLab.DR.BaseService.exe
 - OpenLab Reverse Proxy Configuration Service¥ConfigurationService¥
Agilent.OpenLab.ReverseProxy.ConfigurationService.exe
 - OpenLab Services¥Distributed Transaction Coordinator Service¥
RegistrationTool¥Agilent.OpenLab.DataRepository.RegistrationTool.exe
 - OpenLab Services¥Automation¥AutomationServerHost.exe
 - OpenLab Services¥Diagnostics¥DiagnosticsToolsServiceHost.exe
 - OpenLab Services¥Licensing¥Flexera¥Imadmin.exe
 - OpenLab Services¥Licensing¥Licensing.Service.Host.exe
 - OpenLab Services¥Server¥SharedServicesHost.exe
 - OpenLab Services¥UI¥Agilent.OpenLab.ControlPanel.exe
 - Test Services¥Agilent.TestServices.WebService.exe
 - Test Services¥Central Management Service¥
Agilent.TestServices.Server.Main.exe
- C:¥Program Files (x86)¥Agilent Technologies¥...

リスクとしては、除外したファイルがウィルスに感染しても検出されません。これらのファイルをカバーするには、毎日スキャンが実行されるようにします。

- 4 リアルタイムモニタリング：以下のフォルダーをリアルタイムモニタリング設定の除外リストに追加します。
C:¥Program Files (x86)¥Agilent Technologies¥

ソフトウェアベリフィケーションの起動

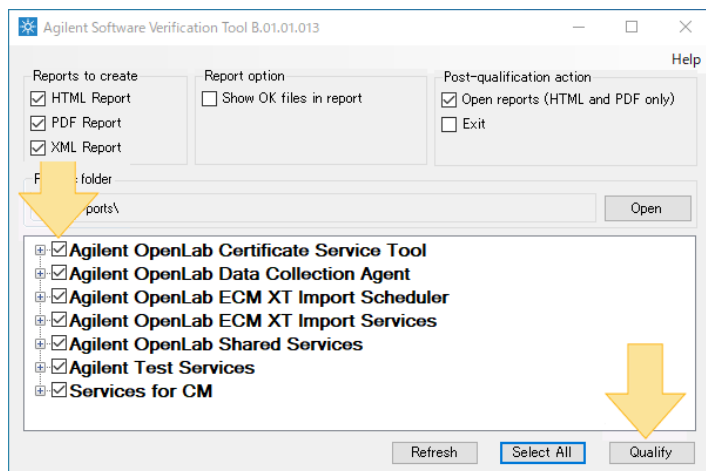
ソフトウェアベリフィケーションツールについて

システム内のクライアントコンピュータごとに個別のインストール手順があるため、インストール中またはシステムが完全にインストールされた後から、ソフトウェアベリフィケーションツールを実行することができます。

システムが完全にインストールされており、システムが正しく構築およびインストールされ、設計仕様通りになっていることを確認する場合に、この手順を使用します。

ソフトウェアベリフィケーションツールの実行

- 1 [スタート] > [Agilent Technologies] > [Software Verification Tool] の順に進みます。
- 2 検証する製品を選択し、[Qualify] をクリックします。アプリケーションが実行され、ソフトウェアベリフィケーションレポートが作成されます。レポートに「不合格」が表示されている場合、コンピュータの要件を確認し、データシステムを再インストールします。ソフトウェアベリフィケーションレポートの結果が「合格」となるまで、システムを使用しないでください。



Windows Server 2022 インストールの場合

OpenLab Server または ECM XT を Windows Server 2022 にインストールした場合、OpenLab Server 2.7 Update 06 以降をインストールし、そのアップデートの指示に従う必要があります。

Windows Server 2022 インストール

34ページの「**OpenLab Content Management サーバー ソフトウェアのインストール**」に記載された手順の完了直後に、Windows Server 2022 の OpenLab Server/ECM XT 2.7 サーバーで以下のタスクを実行する必要があります。

- 84ページの「**OpenJDK の更新**」
- 85ページの「**OpenLab Server 2.7 Update 06 のインストール**」

OpenJDK の更新

OpenLab Server/ECM XT 2.7 のデフォルトインストールでは、OpenJDK 11.0.09 を使用しています。OpenLab Server/ECM XT 2.7 を Windows Server 2022 オペレーティングシステムでサポートさせるには、OpenJDK を更新する必要があります。サポートバージョンの OpenJDK (11.0.21+9) は、SubscribeNet (<https://agilent.subscribenet.com>) の **OpenLab ECM XT Software > OpenLab ECM XT Updates > OpenLab ECM XT 2.7 Updates** にある Windows 2022 Compatibility Package に含まれています。

- 1 開始する前に、サーバーで Software Verification Tool を実行し、すべてのソフトウェア検証レポートでインストールチェックの総合評価が合格していることを確認します。
- 2 Microsoft Windows サービスを開きます。
- 3 **Agilent OpenLab Content Management Search service** と **alfrescoTomcat** サービスを停止します。
- 4 <インストールフォルダー>\OpenLAB Data Store\java フォルダーの名前を *java_old* に変更します（デフォルトのロケーションは C:\Program Files (x86)\Agilent Technologies\OpenLAB Data Store\java です）。

- 5 **Windows2022Compatibility.zip** をローカルフォルダーにコピーして展開します、**Server\OpenJDK** フォルダーを開き、**OpenJDK11U-jdk_x64_windows_hotspot_11.0.21_9.zip** をローカルフォルダーへ展開します。
- 6 **jdk-11.0.21+9** フォルダーを<インストールフォルダー>\OpenLAB Data Store にコピーし（デフォルトのロケーションは C:\Program Files (x86)\Agilent Technologies\OpenLAB Data Store）、フォルダー名を java に変更します。
- 7 新しい **java** フォルダーの **release** ファイルをメモ帳で開き、**JAVA_VERSION** が "11.0.21" になっていることを確認します。
- 8 **Agilent OpenLab Content Management Search service** サービスと **alfrescoTomcat** サービスを開始します。
- 9 サーバーで Software Verification Tool を実行し、すべてのソフトウェアベリフィケーションレポートでインストールチェックの総合評価が合格していることを確認します。
- 10 サーバー 4 台およびスケラブルトポロジーの場合、各 Content Management およびインデックスサーバーで上記のステップを繰り返します。

OpenLab Server 2.7 Update 06 のインストール

Windows Server 2022 で実行中のすべての Content Management およびインデックスサーバーに OpenLab Server 2.7 Update 06 以降がインストールされている必要があります。OpenLab Server 2.7 アップデートは、SubscribeNet (<https://agilent.subscribe.net.com>) の以下の 2 つのロケーションからダウンロードできます。

- **OpenLab ECM XT Software > OpenLab ECM XT Updates > OpenLab ECM XT 2.7 Updates**
- **OpenLab Software > OpenLab Updates > OpenLab CDS 2.7 Updates**

各ソフトウェアアップデートに、インストール説明の readme ドキュメントが含まれています。

7

システムのアップグレード

PostgreSQL データベース搭載の 2 サーバー
システムのアップグレード **87**

オペレーティングシステム変更時の
アップグレード **89**

PostgreSQL データベース 搭載の OpenLab Server/ECM XT のアッ
プグレード **89**

Oracle データベース搭載の OpenLab Server/ECM XT のアップグレード **90**

PostgreSQL データベース搭載の 2 サーバー システムのアップグレード

この手順を使用して、サーバーマシンやオペレーティングシステムを変更せずに、データベースバージョンのアップグレードも含めて、OpenLab Server/ECM XT v2.6 の 2 サーバーシステムを OpenLab Server/ECM XT v2.7 にアップグレードします。

前提条件：

- 最新の更新およびサービスパックがインストールされている（Windows と OpenLab 製品の両方）。
 - ローカル管理者グループのメンバーである Windows ローカルユーザー。
- 1 C:\ProgramData\Agilent\PostgreSqlData-11-OLCM へ移動し、pg_hba.conf ファイルのバックアップコピーを作成します。バックアップファイルを、後でアクセスできるロケーションに置きます。
 - 2 データベースサーバーで OpenLab Server/ECM XT 2.7 インストーラのステップ 1 を実行します。
 - 3 データベースサーバーで PostgreSQL サービスを停止します。
 - 4 C:\ProgramData\Agilent\PostgreSqlData-14-OLCM で、postgresql.conf ファイルを開きます。
 - 5 postgresql.conf ファイルで、#listen_addresses = 'localhost' を listen_addresses = * に変更します。
 - 6 「リモート PostgreSQL データベースサーバーの準備 / 外部 PostgreSQL Server のチューニング」セクションの手順に従って、リモートデータベースのパラメーターを調整します。（25 ページの「**外部 PostgreSQL Server のチューニング**」を参照。）
 - 7 差分バックアップを使用する場合、『Agilent OpenLab Server/ECM XT 管理者ガイド』の「バックアップとリストアの手順 - PostgreSQL の差分バックアップの構成」セクションの手順に従って、postgresql.conf ファイルのアーカイブ設定を更新します。または、C:\ProgramData\Agilent\PostgreSqlData-11-OLCM の postgresql.conf ファイルからアーカイブセクションをコピーして貼り付けることができます。
 - 8 バックアップした pg_hba.conf ファイルを C:\ProgramData\Agilent\PostgreSqlData-14-OLCM フォルダにコピーします。
 - 9 データベースサーバーで PostgreSQL サービスを起動します。

- 10 Content Management ウェブインターフェイスを起動し、ファイルとフォルダーが表示される（更新されたデータベースにアクセスできる）ことを確認します。
- 11 Content Management サーバーから OpenLab Server/ECM XT 2.7 への一括アップグレードを実行します。（OpenLab Server/ECM XT 2.7 インストーラのステップ 1 から 4 を実行します。

注記

この処理中に追加の PostgreSQL サービスが起動されます。続行する前にこのサービスを無効にしてください。）

- 12 OpenLab Server/ECM XT クライアント 2.6 を OpenLab Server/ECM XT クライアント 2.7 へアップグレードします。
- 13 エラーがないかログを確認します。

オペレーティングシステム変更時のアップグレード

OpenLab Server/ECM XT の古いバージョンをバージョン 2.7 へアップグレードするには、Windows オペレーティングシステムを 2012 から 2016、2019、または 2022 へアップグレードすることが必要な場合があります。

この章の手順では、オペレーティングシステムの変更が必要な PostgreSQL または Oracle を使用した OpenLab Server/ECM XT システムのアップグレードについて説明します。

PostgreSQL データベース 搭載の OpenLab Server/ECM XT のアップグレード

この手順を使用して、Windows Server 2012 マシンから PostgreSQL データベースおよびコンテンツをバックアップしてから、そのデータベースおよびコンテンツをリストアし、OpenLab Server/ECM XT バージョン 2.7 を Windows Server 2016、2019、または 2022 オペレーティングシステムにインストールします。

以下の手順では、OpenLab Server/ECM XT バージョン 2.3 からバージョン 2.7 へのアップグレードの例を使用しています。

- 1 バージョン 2.3 の OpenLab Server で、以下のサービスを停止します。
 - alfrescoTomcat
 - OpenLab Shared Services
 - postgresql-x64-9.3
- 2 バージョン 2.3 の OpenLab Server で、Windows Server バックアップを使用して以下のファイルを共有クォーテーションにバックアップします。
 - C:\¥DataStoreContent
 - C:\¥DataStoreIndex
 - C:\¥ProgramData¥Agilent¥Installation ("com.agilent.datastore.cache" ファイルを C:\¥Program Files (x86)\¥Agilent Technologies¥OpenLAB Data Store¥tomcat¥temp からコピーした後)
 - C:\¥ProgramData¥Agilent¥PostgreSqlData-9.3

- 3 クリーンな 2016/2019 Server マシンで Windows Server バックアップを使用して、共有ロケーションに保存されたバックアップファイルを復元します。同じファイルコンテンツ構造を維持します。
- 4 Windows Update サービスを有効にして開始します。
- 5 OpenLab バージョン 2.3 のインストーラから、**OpenLAB Server** を選択し、ステップ 1 - ソフトウェアに必要なコンポーネントのインストールおよびアップグレードを実行します。
- 6 Windows Update サービスを停止して無効にします。
- 7 OpenLab バージョン v2.7 のインストーラを使用して、**OpenLab Server/ECM XT** を選択し、ステップ 1-4 を実行します。
- 8 OpenLab Server/ECM XT を再度アクティブ化します。
 - a OpenLab コントロールパネルで、[管理] > [システムコンフィグレーション] > [システム設定の編集] をクリックします。
 - b [Content Management] をストレージタイプとして選択し、[次へ] をクリックします。
 - c [サーバーの変更] を選択し、Content Management URL を適切なホスト名に更新し、[ライセンス認証] をクリックします。
 - d [次へ] をクリックし、[適用] をクリックします。
- 9 現在のホスト名を使用するようにライセンスサーバーを更新します。OpenLab コントロールパネルで、[管理] > [ライセンスライセンス] > [サーバーの変更] をクリックします。
- 10 新しい 2.7 ライセンスを追加します。

Oracle データベース搭載の OpenLab Server/ECM XT のアップグレード

この手順では、Oracle 12cR1 データベースを使用した Windows Server 2012 上の OpenLab Server/ECM XT システムを、Oracle 18c データベースを使用した Windows Server 2016 または Windows Server 2019 で動作する OpenLab Server/ECM XT バージョン 2.7 システムへアップグレードします。

この手順では ECM Server/XT バージョン 2.3 を例として使用しています。

- 1 Windows Server 2016 または 2019 と Oracle 18c 搭載のシステムを新たなマシンにインストールします。
- 2 『Agilent OpenLab Server および OpenLab ECM XT 管理者ガイド』の「バックアップとリストア手順」の章の手動バックアップ手順を使用して、ECM XT バージョン 2.3 のファイルをバックアップします。
- 3 Oracle 18c マシンで、**prepare_db_oracle.sql** を実行します。このファイルは、インストールメディアで利用できます。次に、インポートコマンドを実行してバックアップからデータベースをリストアするには、Oracle のドキュメントを参照してください。
- 4 『Agilent OpenLab Server および OpenLab ECM XT 管理者ガイド』の「バックアップとリストア手順」の章の手動バックアップ手順を用いて、OpenLab Server/ECM XT バージョン 2.4 のファイルを、OpenLab Server/ECM XT バージョン 2.7 をインストールする新しい Windows Server 2016、2019、または 2022 マシンにリストアします。
 - ステップ 2：コンテンツフォルダー、インデックスフォルダーおよびアーカイブフォルダーのリストア
 - ステップ 3：OpenLab Server/ECM XT のコンフィグレーション情報のリストア
- 5 新しい Windows Server 2016、2019、または 2022 マシンで、ECM XT バージョン 2.7 のインストーラのステップ 1-4 を実行します。
- 6 新しい Windows Server 2016、2019、または 2022 マシンで、『Agilent OpenLab Server および OpenLab ECM XT 管理者ガイド』の「バックアップとリストア手順」の章のリストア手順の以下のステップを実行します。
 - ステップ 5：OpenLab Server/ECM XT のアクティブ化
 - ステップ 6：クライアントコンフィグレーション
 - ステップ 7：コントロールパネルでのライセンスの確認



8

ソフトウェアのアンインストール

アンインストールについて **93**

OpenLab Content Management のアンインストール **93**

アンインストールについて

OpenLab Content Management アンインストーラが OpenLab Content Management のアンインストールを自動的に実行します。

OpenLab Content Management をアンインストールするには、すべてのサーバーおよびクライアントに対する管理者権限を持っている必要があります。パワーユーザー権限では十分ではありません（修復を開始できません）。

OpenLab Content Management を再インストールする場合は、PostgreSQL/Microsoft SQL/Oracle を削除せず、データベースをそのまま維持してください。再インストール時には、既存のサーバーと OpenLab Shared Services データベースおよびコンテンツディレクトリを以前インストールした OpenLab Content Management バージョンとして選択してください。

OpenLab Content Management のアンインストール

サーバーまたはクライアントマシン上の OpenLab Content Management をアンインストールするには、

- 1 Windows コントロールパネルから **【プログラムと機能】** を開きます。
- 2 **【Agilent OpenLab Server】** または **【Services for CM】** を選択し、**【アンインストール】** をクリックします。**【OpenLab Server アンインストーラ】** が開きます。
- 3 **【アンインストール】** をクリックして、アンインストールを開始します。

リストされているコンポーネントがすべて自動的にアンインストールされます。

コンポーネントが正しくアンインストールされると、**アンインストール画面の【ステータス】** フィールドに表示されるステータスが **【検出済み】** から **【アンインストール済み】** になります。

アンインストールを中断するには、**【キャンセル】** をクリックします。

- 4 アンインストールが完了したら、**【終了】** をクリックし、アンインストーラを閉じます。

- 5 **【プログラムと機能】** リストから、**【Agilent Software Verification Tool】** を選択し、**【アンインストール】** をクリックします。
- 6 アンインストールを完了させるためにシステムを再起動します。

営業およびサポートのお問い合わせ先 96

営業およびサポートのお問い合わせ先

営業およびサポートのお問い合わせ先については、以下のウェブサイトを確認してください。

<https://www.chem-agilent.com/contents.php?id=1001827>

アジレントコミュニティ（英語サイト）

1万人以上のユーザーが参加するアジレントコミュニティで、疑問が解消されるかもしれません。プラットフォーム技術によって構成された、厳選されたサポート資料をご覧ください。同業者や協力者に質問することができます。作業に関連した新しいビデオやドキュメント、ツール、ウェビナーで通知を受けられます。

<https://community.agilent.com>

www.agilent.com

© Agilent Technologies, Inc. 2024
文書番号 D0013946ja Rev. B.00
2024 年 2 月

